

## 第一章 エイカベイン

拳が、激しく人間の肉体を拍つ音がした。

怒号に、什器が押し倒されて散乱する非音楽的で無秩序な騒音が被さるようになり、室内の空気をかき乱す。

「……の野郎」

フロアを蹴る音。拳の風切り音、そして打撃音が続く。テーブルが倒れ、食器が散乱し、吹っ飛んだ料理を避けて蹴られた椅子がけたたましくフロアを叩いた。

人間が倒れ込む音が重なり合い、苦痛をこらえかねた苦鳴が不協和音を奏でる。喧噪が急におさまり、騒音源の少年たちの荒々しい息づかいがとつてかわるまでいくらかからなかつた。

フロアに折り重なった被害者に、いっそ穏やかなほどの視線を投げ下ろしていた長身の少年は、手近の椅子を引いて腰を下ろす。優美と言つていい身のこなしが、暴風圏を逃れて離れたテーブルに退避していた他の少年たちの視線を吸い寄せる。

一二、三歳くらい……周囲の少年たちに比べると際だって端麗な、見方によつては少女のようにさえ見えないでもないほどに繊細に整った顔立ちの少年は、何事もなかつたように、中断された夕食を再開する。

「……もう、終わりか？」

……彼らの期待していた科白が、端麗な少年の唇から放たれることはなかつた。

ようやく立ち上がるだけの気力を回復したらしい被害者の少年

が、腫れ上がった唇を歪める。

「……畜生、覚えていろ、ファウルス！」

人の声の形をとった憎悪の塊は、しかし、“ファウルス”と呼ばれた美少年の表情をいささかでも動かすだけの力を持っていなかったようだった。

口元に運びかけたミルク・カップを空中で止め、美しい少年は視線を巡らす。ブラック・グリーンの瞳が渦巻くような金色の光を湛えたように見えたのは錯覚かも知れなかったが、罵声を放った少年の背に氷の刃を走らせ、声帯を凍り付かせるには十分すぎた。

金色の炬火に似た視線で喧嘩相手を一瞥すると、少年はもうそれ以上、彼らに対する興味も関心も失ったようだった。

「いつまで寝ている？ 叩きのめされた程度で“覚えていろ”とは情けない。誰かに助け起こしてもらえなくても思っているのか！ さっさと起きろ、起きないかっ！」

決して大きくない声だった。

しかし、ほんの一〇数秒前までは顎や腹を押さえて床の上をもがき回っていた少年たちを跳ね上がらせるに十分な重みをはらんでいた。

少年……レーフル・ファウルス・ネレイド……が腰を下ろしていた椅子が音もなくフロアを滑り、少年が立ち上がるスペースを空けた……というのも錯覚だったに違いなかった。ブラック・グリーンの視線が旋回し、声の主を視界に入れる。極くわずかなだけ動いた眉が、彼の内心を表したすべでだった。

燃えるような赤毛をきつちりと結び上げた背の高い若い女性が、人の形をした暴風が吹き荒れた跡に、ランプのように明るく輝く眸を注いでいた。少年期の彼らが思わず視線を吸い寄せられてしまうほどに整った肢体に、緑褐色の軍服を姿勢よく纏っている。

「新任教官のアヴドーチャ・アルドリーシャ中尉だ。早速だが、本日の子科学校寮の当直士官を務めることになった」

女性は、直立不動の姿勢をとった少年たちに視線を巡らせた。「食事が残っている者はそのまま食事を続けよ。そうでない者は退席し、必要であれば傷の手当を受け、自室に戻りなさい」

「で、でも、ぼくたちはまだ食事が……」

臉を手ひどく腫れ上がらせている少年が抗議した。一四歳くらい。身体は大きくはないが、穏やかさを欠いた粗暴さの印象を与える顔立ちに、アルドリーシャ中尉は眉の端を跳ね上げさせた。それがせせら笑いの表情であることに、少年たちは気づかなかったようだった。

「抗議はいいが、名前くらい名乗って欲しいものだわ、少年ポレイ。でないと、少年、としか呼びようがない」

「ファンネル・マクレガー！」

「では、ミスタ・マクレガー、夕食時に騒動を起こすのなら、それなりの危機管理策を用意しておくことよ。複数で喧嘩を仕掛けたからと言って、自分の食事が無事に残っているととは限らない。喧嘩は非常手段。最悪の場合を予測して仕掛けるよう心がけるべきだわ」

「初めに仕掛けてきたのはファウルスです！」

「つまり、きみはこの……」

アルドリーシャの明るい灰色の視線を、レーフル・ファウルスは完璧なほどの無表情さで受け流した。

「このミスタ・ネレイドが、きつかけも意味もなく殴りかかってきたと主張するのだな？」

「……は……はい、そうです！ こいつは気がいいです。頭が変なんです！」

「そういう誹謗の言葉を気安く使うな、少年。言葉を安っぽく使うのは、自身がその程度に安っぽい人間だと自分で触れ回っているようなものよ」

他者から叱責を受けたことなど皆無なのだろう。マクレガーと名乗った少年と、彼の仲間たちを立ちすくませたのは、鞭を思わせる響きで面上を拍った声の調子だった。

立ちすくむ少年たちに、アルドリーシャ中尉は、綺麗に結い上げた深紅の髪をかき上げ、続けた。

「いずれにしても、ここで諸君に用意してもらえる食事は諸君自身がフロアにまき散らしたのだというとは認識したまえ。それでは腹が減るといふのであれば、自分自身の責任において何とかしなさい。」

さあ、後始末は専門家に任せて諸君らは退室せよ。今日の意趣を晴らしたということであれば、作戦を練り直して後日の再戦を挑めばよい」

「……」

なお理解も納得もできない。いや、叱責されたこと自体が不満で仕方がないという表情の少年たちに、アルドリーシャ中尉は微笑を閃かせる。自己主張を拒まれたことがなく、自我ばかりを肥大させたこの手の子供たちほど彼女の神経を逆撫でする存在はなかったのだ。

「異論があるなら、聞いてやってもいいが？」

いっそあでやかと言っていいほどに鮮やかに皓い微笑は、居丈高な怒声をはるかに上回る効果を与えた。

半ば跳び上がるようにして食堂を駆け出していく少年たちを、アルドリーシャ中尉はすぐに関心の範囲から追い出してしまったようだった。

「……規則だから確認しておくが、原因は？」

「……」

「喧嘩を禁ずるとは言わないが、しかし、理由の説明までを拒むというのはちよつと困る。予科学校は完全に空軍の学校だというわけではないけれど、空軍の組織の一部に属してはいません。当直教官として、報告書に記載する内容だけは聞かないわけにはいかない」

間もなく一三歳の声を聞く少年は、小憎らしいまでに静まった表情で、自分より頭一つ以上、上背のある女性士官を凝視したまま沈黙を守っている。

一三歳の少年らしい年長者への何となく反感や、無理に大人ぶろうとする精神的な背伸びを、その余りに静かな表情から感じとることはできず、アルドリーシャ中尉は肩を竦めた。

「ネレイド……という名前も原因の一つなのか？」

一歳の秋にレーフル・ファウルス・ネレイドが士官学校予科の扉を叩いてから、既に一年余り。入学以来、首席の座を明け渡そうとしないレーフル・ファウルスは、下級生の多くからは憧憬を、上級生の大多数からは軽重の反感をもって迎えられる。

前線から着任したばかりであるアヴドーチャ・アルドリーシャも、すでに特記事項としてレーフル・ファウルスの存在を知っていた。

レーフレム・ナイザル・ネレイド……タート・レイピア恒星区出身の上院議員。連邦圏でも最大級の政治勢力を統括する超大物の政治家。

その“ビッグ・ナイザル”の次男がレーフル・ファウルス。「父がナイザル・ネレイドだつてことと、ぼくがこの学校にいることは関係のないことです」

煌めくようなブラック・グリーングリンの双眸が、繊細な容貌を一転して驚くほどに靱い表情に変えた。

「……明日の朝、始業前までに、本件に関してわたしにレポートを提出すること。レポートは当然、当事者双方から提出して貰う。それで本件は終わりにする」

「……了解しました、中尉殿」

「邪魔をした。食事を続けてよろしい」

\*\*\*

「アヴドーチャ・ミアイロヴナ・アルドリースカヤ中尉……」

フルネームで呼ばれるのが嫌いだった。

私はアヴドーチャ・オプロフスカヤだ、と弾き返したいのを耐えて、肉の厚い上官の顔を睨み据える。睨む意図はなかったにしても、“海賊回廊”と“第二次メルティア紛争”の戦場を往来した最前線上官の眼光はそう簡単には抑えられないものではない。

アヴドーチャ・ミアイロヴナ・アルドリースカヤ……通称アヴドーチャ・アルドリシヤは二十一歳。

士官学校入学が一五歳で卒業は一八歳。通常、士官学校の卒業生は、卒業後の翌年から、遅くとも二年目に中尉に進級する。中尉になったのが二十一歳になってからという経歴は、しかし、彼女の士官としての無能力を意味しない。

「何だね、この日報は？」

「不備がありましたか？」

連邦空軍は、毎年八万人もの士官を誕生させる。八万人の内、二万人強が士官学校での教育を経て任官する。他の六万人余りは、幹部候補生士官をパスした下士官であり、士官学校以外の各種学校での再教育の後、ミッドレンジプラン抜擢を受ける。

一期二万名もの士官候補生を教育する士官学校には二〇〇もの分校があり、一恒星区に平均して一〇分校。各分校に在籍する候

補生は一期あたり一五〇人から二〇〇人。その教育年限は最短二年、最長四年である。

士官学校ではないが、士官学校予科校という教育機関があり、これは全連邦圏に数百カ所も設けられていた。一二歳以上で、各教科が一定以上の水準に達した生徒には、連邦空軍の持つ上級学校の受験資格が与えられる。最年長で一五歳で卒業するまでに受験資格を得られるのは全生徒の三分の一に過ぎず、士官学校の門をくぐれるのは、更にその七割程度でしかない。

とは言え、国費で……厳密には各恒星区政府と連邦政府が費用を折半しているのだが……高等学校卒業資格までを得られる士官学校予科は連邦圏全域からの入学生を集める。士官学校を含めた大学レベルの教育機関への入学者が毎年六〇〇〇万を数える連邦圏で、“優秀な”学生確保のために連邦空軍が設けた仕組みの一つが、この士官学校予科だった。

空軍が主宰する学校ではないから校長は民間人だが、一方で学校監と呼ばれる監査役は現役の軍人だった。

惑星シエルメスの連邦首都から南へ五〇〇キロあまり離れたエイカベイン市にある空軍士官学校予科では、一〇〇〇人余りの一〇歳から一三歳までの少年・少女たちが全寮制の生活を送っている。

「不備がありましたか、じゃないだろうが！」

予科学校監のファルケンファイン准将は手のひらで激しくデスクを拍つ。

「二月一日、予科学校男子寮食堂での騒動。レーフル・ファウルス・ネレイド生徒とファンネル・マクレガー、ヨン・シン生徒を初めとする五人の生徒の喧嘩沙汰だ」

「どのような不備でしょうか？」

「不備というんじゃない！」

ファルケンファイン准将の、敏腕な銀行家を思わせる外貌のこめかみに、太い血管が浮かび上がり、痙攣するように震える。

何がこの軍事官僚の不興を買ったかはすぐに分かった。それを口にするこの不利を知っていたにしろ、アヴドーチャは反問を抑え切れるほどの自制心に恵まれていない。

「喧嘩沙汰を報告したのが不備だったとおっしゃるのですか」

「その通りだ！」

「上院議員の次男であろうと、地元の大資産家の子弟であろうと、喧嘩沙汰は報告せざるを得ません。別に彼らが処罰に値するとも報告しておりませんが……」

こめかみの血管が更に膨れ上がる。

破れるかな……アヴドーチャは半ば以上期待し、期待が満たされなかったことを頭から叩きつけられた怒声を失望と共に受け入れる。

「たとえ賞罰にかかわりなくとも、正規の日報に載せてしまったのでは、彼らの将来の経歴に傷がつく。その上に、マクレガーたちに夕食を抜かせたというではないか。クレームを受けるのはこのわたしだけだ！」

少年期の喧嘩沙汰程度の事件で経歴に傷がつくくらいなら、将来にわたっても大して役にも立たないではないか……

「戦場では父親の肩書きで戦うわけにはいきません」

「第一線に出るのは、貴官のような佐官止まりの前線士官の役目だ。戦場は彼らが必要としないし、彼らは戦場で生命と昇進を引き替えにする必要もない」

「……」

「とりあえず、今回はわたしの権限で日報を削っておく。予科学校生徒の経歴をもう少し頭に叩き込んでおくことだな。アルドリースカヤ中尉、貴官の経歴は知っている」

「それは小官のプライベートに属することですわ」

「カルシュ・コーラルの娼婦が母親」

馬鹿にしきった口調だった。

「レアナ（惑星カルシュの首都）でストリート・ギャングをやっているところをセリア恒星区の好事家団体に養女にして貰っただけでも十分だったろうが……」

既に固く握りしめられていたアヴドーチャの拳が、ほとんど痙攣に似た動きを示したのにファルケンファインは気づかなかったようだった。まして、それが分厚い頬の肉ごと彼の奥歯を根元から叩き砕こうとする衝動を、紙一重の所で押さえつけた動きだったことにも。

「閣下！」

「焦ったところで、貴官がこれ以上、連邦空軍で得るところはないぞ。精々、空軍から逐われぬように留意することだな。はつきり言って、貴官のようなカルシュ・コーラル出身の士官が身近にいるだけで私は不愉快だ。これ以上不愉快の種を増やしてくれないことを、切に望むものだ」

\*\*\*

「父がナイザル・ネレイドだったことと、ぼくがこの学校にいることは関係のないことです……か」

深夜。

皮肉っぽく歪められた血の色の唇が、シニカルな響きをまぶした咳きを紡ぎ出す。

手にしたグラスに満たされた琥珀色の液体が、淡い照明を透かして、アヴドーチャの端麗な、といつていい容貌に陰惨なとさえ言いたくなるような陰影を与えていた。

同じ言葉だった。

“カルシユの娼婦の娘を高級士官に登用しなきゃならんほど、空軍は人材に窮しちゃいないさ……”

少尉任官と同時に“海賊回廊”と呼ばれる宇宙賊の猖獗宙域方面に配属され、宙雷艇長、突撃艦副長、駆逐艦宙雷長で功績を上げた。五六五年の“メルティア紛争”でも第二艦隊の近接格闘戦闘集団に参加し、戦果を上げた……にもかかわらず、彼女の元に伝達されたのは“駆逐艦『エルフVII』宙雷長の任を解き、士官学校予科学校コーネット校付き士官を命ず”との辞令だった。

“大尉昇格に適格なれど、事情により留保し、士官学校予科付き士官に任ず”という人を小馬鹿にしたような理由付け。予科学校監ならともかく、“閑職”、あるいは“窓際”を大書して額縁をつけたようなものであることを知るアヴドーチャにとって、屈辱以外のなものでもない人事でしかない。

“もう一度言ってみろ”

“ああ、何度でも言ってみろ。カルシユ娼婦の私生児が！”

砕けちったグラスに交じって折れ飛んだ前歯と血飛沫。

“レアナのストリート・ギャングを甘く見るな！”

受けた反撃が、アヴドーチャの激昂を煽る方向へ駆り立てた。

殴打を上膊で受け、相手の鼻柱を殴り砕き、身を沈めて羽交い締めから逃れざまに固めた肘を鳩尾深く叩き込む。拳に頬を掠られるのとお返しに、爪先で顎を蹴り上げ、後ろ回し蹴りにブーツの踵で脇腹を抉る。

怒号と悲鳴、テーブルがひっくり返り、果ては椅子やボトルが宙を切る光景が、アヴドーチャの時間を一〇年近く遡行させていた。

## 第二章 レアナの一人軍隊

ワンガール・アーミー

右の耳元の空気を切り裂いて、衝撃波が通り過ぎた。

反射的に左に傾きかかると身体を放り投げるようにして、前に転がった。

一瞬の遅滞もなく身体を丸めて二転三転する少女を追って、ミシン目をかけるような砂煙があがる。

圧縮エアガンの着弾。

エアガンと言っても、高度に圧縮した空気を弾丸替わりに射出する。有効射程五〇メートル。近距離で撃たれば肉を抉られ、骨を砕かれる。圧縮ポンプの電源が切れるまで、リロード装弾不要で連射できる上に発射音がほとんどしない。

「ちいっ！」

反撃のチャンスがつかめない。撃たれればなしだ。振り返ることもできない。

しなやかな身体のパネを生かして跳ね起き、低い姿勢のまま全力でダッシュをかける。深紅の髪が、燃え上がる炎の波のような残映を宙に描いた。

まっすぐ走ってはすぐに直撃を貰う。右へ、左へ、不規則なステップを踏みながら、姿勢は変えない。負荷に耐えかねて足首とつま先、踵が上がる悲鳴は無視する。止まれば、蜂の巣。貫通力は弱いから、実際はクレーターだらけの衛星表面といったところだろうが：

射程から逃れるか、薄いコンクリート・ボード一枚、遮蔽物が

あればエアガンなど怖くはないのだが：首都レアナのダウンタウンの中央を貫くメインストリート。ビル多くは閉鎖され、道路は連邦空軍あめりかふくたつちに取り片づけられて逃げ込む瓦礫の山もない。

着弾が移動し、彼女の足下の道路を抉る。衝撃波が踵やふくらはぎを擦過し、熱した針金に触れたような痛みが突き抜けるが、砂煙の高さが減じているのを彼女は見て取っている。

射程から出られる：

思った瞬間にそれが来た。

強靱な革ひもでコンクリートを叩きつけたような、ビシッと言う音。

「——！！」

激痛は左足首から来た。

低い姿勢が一気にバランスを崩す。そのまま、支えきれずに横転。夕闇の迫りかけた空、薄汚れたダウンタウンの町並み、ひび割れた舗装の破片やコンクリートの細片が奇妙なまだら模様を描いているメインストリート。視界が何度も入れ替わり、ようやく止まったとき、少女は自分の左足の状況を確認することができた。左足首の外側。ふくらはぎにかかるあたりが鮮血に染まっていた。半直撃。空気弾エアービレットが薄い革のズボンを引き裂き、皮膚を突き破って、筋肉を抉っていた。

——骨は外れてる。動脈もやられてない：

「やっど捕まえた。観念しろ、ドーチャ」

ドーチャと呼ばれた少女は、視界に狙撃手の姿を入れる。

少年：たちだった。彼らを“少年”というカテゴリーにくくっていいものならば。

○センチを下る者はいなさそうだった。いずれも第四種野戦軍装

と呼ばれる迷彩服を着込み、腰には長大な戦闘ナイフをぶち込んだ五人の少年たち。

服装もさることながら、彼らに共通しているのが、その雰囲気。知性などという言葉とは全く縁のない、脂ぎった粗野さと同時に、彼らのざらつくような目の奥に潜んでいる虚無。明日のことなど考えてもどうにもならない。今、この一瞬だけがすべて。一時間後に何が起ころうと知ったことじゃない。

「ファイティング・ナイフ・ドーチャも、こいつにや敵わねえさ」  
迷彩服の上に、やや分厚い服地のベストを着けているのが首領格に見えた。

どうやら防弾ベスト……小規模な暴動の時に、レアナの治安警察部隊が着けているやつだ。

左足首を押さえ、うめき声を上げているように見せかけながら、ドーチャの目は冷静さを失っていない。

自慢げに首領格が掲げて見せる圧縮エアガンに、ドーチャはさして興味も示さなかった。

——左足は当然、利かない。

さりげない動きで右手が革ジャンのポケットに滑り込んでいるのに、少年たちはまだ気づいていない。

自身と、彼らとの距離間隔を把握すると、ドーチャは激痛に耐えかねた風情で視線を伏せて小さく悲鳴を上げてみせる。折からの夕陽を浴びていっそう燃え上がるような色合いを帯びてきた赤毛が小刻みに震え、少年たちの勝利感を煽ったようだった。

「おい……何とか言え」

「降参しました。あなたの女にして下さい、とでも言って土下座すりや、いのちだけは救ってもらえねえでもねえぜ、あん？」

「そうはいかねえ」

首領格の声は、はっきりとした獣欲を帯びてざらついた。

「さんざん、仲間を殺してくれたお返しは、きつちりつけてもら  
うぜ。どんな女なのか、いってえ何歳なのかさえ、これまで分かっ  
ちやいなかったんだからな」

持つてろ……エアガンを子分に預け、首領格はドーチャの傍ら  
に腰を下ろす。

「ゆつくり、拝ませて貰うぜ、ファイティング・ナイフ・ドーチャ」  
やおら腰からナイフを抜く。

「いや！」

革ジャンの襟もとにナイフを差し込まれ、初めて少女が小さく  
叫んだ。

「けっ、まるで子供みたいな声、出しやあがるぜ。ここまで来て、  
嫌もねえだろうが」

「嫌だつてんなら、自分で逃げてみな」  
「逃げられるもんならなあ」

野卑な笑い声の合唱。  
「——？」

合唱が途切れた。

「え——？」

少女の衣服を一気に切り裂こうとした首領格の少年の動きが止  
まっていた。いきなり電源を抜かれたロボットに似た、不自然で  
唐突きわまりない停止。

少年たちの内の何人かは、灰色とも緑色ともつかない不思議な  
色合いの瞳が、明るいランプのような煌めきを帯びて輝くのを確  
かに見たと思つた。もつとも、思つただけで、長くは記憶を保て  
なかったのだが。

棒立ちになつた首領格の少年の咽喉が、真一文字に切り裂かれ  
ていた。笛を吹くような、甲高い音を立てて傷口からどす黒い噴  
水が噴き出していた。驚くほど高くまで噴き上がった鮮血のシャ

ワーは、時ならぬ驟雨のように道路を叩き、禍々しい色彩に染め  
ていく。

「しゅ、首領！」

誰が叫んだのか、もはや分からなかった。

一人は、もろに鮮血のシャワーを頭から浴び、しこたま目に流  
れ込んだ血糊で視界を塞がれる。

エアガンを預けられていた一人は、銃を構え直す余裕もなかつ  
た。

黒いつむじ風が目の前を薙ぐように走つたように見えた瞬間、  
彼の視界は真紅から、永遠の暗黒へ突き落とされる。

「目……目、俺の目があああつ」

エアガンを放りだし、切り裂かれた両目を両手で覆う。指の間  
からあふれ出る幾筋もの流れが、頬に鮮血の抽象画を描いていく。  
放り出されたエアガンをつかんだ手が、素早く安全装置を解除  
し、銃床を小脇に抱え込む。

「な、こ、こいつ！」

銃を向けられた、と気づくよりも、さして大きくもない咳き込  
むような衝撃音の連射を銃口が吐き出す方が早かつただろう。ト  
リガーが引かれればなしになった銃口がぐるりと旋回する。少年  
たちの迷彩服のズボンの布地が次々に内側から緋色に弾け、噴き  
出した液体が見る見る両脚を真っ赤な二本の棒に変えていく。

一〇秒もかからなかった。

さつきまで勝ち誇っていた五人の少年たちは、壊れたロボット  
そのままに路上にのたうち回っていた。首領格だけは既に絶命し  
たらしく、ガラス玉のようになった目を見開いたまま、もはやび  
くりとも動こうとはしない。

銃を杖代わりにして立ち、ドーチャはその光景を眺めている。  
人一人を即死させ、四人に瀕死の重傷を負わせた。多分、夜が

明けるまでに四人とも死ぬだろう。  
何の感慨もなかった。

\*\*\*

エアガンを杖代わりに、ドーチャが帰り着いたのは、レアナ・ダウンタウンの一角。とりわけ治安の悪いことで知られるサブルーダー地区。一〇年余り前まではレアナの主要商業区画として栄えていた。そのサブルーダー地区を一挙に荒廃に追い込んだのは、二年前の大暴動だった。

『第八次レアナ暴動』として知られる大暴動の鎮圧に、連邦は地上師団三個、約一万五〇〇〇の機動歩兵を投入した。約一週間で地区の六割が焼け落ち、居を構えていた連邦の大資本たちはサブルーダー地区に見切りを付け、レアナの他の一画に新たな経済拠点を移してしまった。

以来、サブルーダー地区は他へ移ることもできず自暴自棄にその日暮らしを送る旧市民と、治安の悪化に乗じて入り込んできたブラック・マーケットの勢力が支配する犯罪都市に変貌している。陽がとっぷり落ち、ストリートには人影はほとんどない。無論、それが見せかけに過ぎないことをドーチャは知っている。そここの廃ビルの角、破れた二階の窓、半ば朽ちかけた非常階段の踊り場から、左足を引きずるように歩く彼女に注がれる、温かいと言いつつ、言い難い視線の群。

時々、ドーチャは視線を巡らせ、密やかに、しかし無遠慮に注がれるこれらの視線の主に、靱い光を湛えた視線で応じる。すると、視線の主たちは、ある者はうるたえ、ある者は関心を失って視線を逸らせていくのだ。

彼女が入っていったのは、火事の痕も生々しい廃ビルの一つ。かつては裕福な連邦市民のアパートだったらしく、贅沢な外装や

豪華なエレベーターなどの名残が焼けただけ、かえって荒廃した雰囲気強調している。

エレベーターなど、もはや動かない。

左足の痛みはひどくなる一方だった。止血したものの、傷が大きすぎた。血が止まりきっていない。

「——？」

神経質に、自分の足跡を確認する。幸い、血痕が後につくほどには至っていないが、包帯代わりに足首に巻き付けたシャツの端切れが濡れて重くまつわりつく。血の臭いも鼻についてきた。

四方八方からそそぎ込まれる監視の視線に囲まれながら、三階までゆっくりと階段を上っていく。ただし、彼女の負傷に気づいた視線が慌ただしく揺れ、声にならないざわめきがビルの中の空気を震わせ始めていた。

ドアの一つ。

「けが、したのか」

リズムをつけたノックに、内側から声が返ってきた。平板な、感情を示さない声。

「絡まれてた。エリムの馬鹿たちに」

「自業自得だぞ、ドーチャ」

ドアが開く。出迎えたのは浅黒い肌の、小柄な少年だった。見た目だけで判断すれば、まだ一〇代の半ばには行っていないかも知れないとも思える。

もとは三ベッドルームくらいの豪華なアパートらしかったが、今は荒れ切った部屋だった。

家具はほとんどない。すり切れきって、コンクリートがこここで顔を覗かせている床の上に、壊れかけた椅子が二脚。どこかで拾ってきたらしい、これもすり切れ、スプリングが飛び出しているマットレスが三つ四つ、床に放り出してある。

「ここんところ、エリムの子分ばつかし痛めつけてっだろ。気をつけるって言った。あいつら、頭ないけど、しつこいンで有名だ：で、けがは？」

「見れば分かるでしょ？ エリムの馬鹿はあんたたちの縄張と密造酒の施設を狙ってたんだ。さっさと始末しなきゃ、こつちが危くなつてた。あんたたちじゃ、エリムたちにや敵わないってから、あたしが代わってやつたんじゃないか。感謝の言葉もないの」

「——撃たれたのか。ドジ踏んだな、アヴドーチャ・ミアイロヴナ」

「馬鹿にしてるの？」

壊れかけた椅子に座り込み、ドーチャは剣呑な視線で目の前の少年を睨み据えた。少年は僅かに肩を竦めて、隣室に引つ込み、バケツをぶら下げてくる。水が満たされている。

「明日の水くみはドーチャの番だ」

もう一度、引つ込み、今度は古ぼけた瓶を持つてくる。

「何よ、これ」

「売りモンのウイスキー。これでもアルコールだ。消毒しろよ」

「密造酒でウイスキーが聞いて呆れるよ」

「自分でも売ってるくせに」

「お黙り！」

バケツの水で傷口を洗い、消毒液代わりのウイスキーを吹き付けているドーチャをよそ目に、少年は彼女が杖代わりにしてきた銃を手にとっている。感心したようにためつすがめつ眺めてから、安全装置の存在に気づく。

「——！」

いきなり、壁面に穿たれた弾痕に、ドーチャは呆れ返ったように目を剥く。

「ジェード！」

「凄え、ほんとに撃てるんだな」

驚いたようなジェードの、濃いクルミ色の目がまん丸だった。

「欲しけりやあげるよ、ジェード。電池の換えはないから、切れたらおしまいだけだ。あんた、ナイフ欲しがってたけど、その方があんたの護身用にはいいかも知れない」

「いいのか？」

ジェードと呼ばれた少年の声が、初めて少年らしい響きを帯びて震えた。

「サンキュ、ドーチャ」

「商売モン、ありがと……」

「医者にかからなくていいか？」

「ジェードの知り合いのヤブ医者？ そうだね……」

ジェードの知り合いの医者というのはもぐりだ。この地区がまだ栄えていて、富裕な連邦市民が住んでいた頃、医者の手を助けていたとか言うが……ジェードの『組織』に転げ込んだのが四年前。

『第八次レアナ暴動』で母親を失った直後で一〇歳の時。ジェードは当時一三歳。今は一七歳だが、上背のあるドーチャと並ぶと、まるで姉と弟。めつたにないことだが、ドーチャが自分の実際の年齢を語ると、たいてい相手は絶句して言葉を失う。ドーチャを“オレの女だ”と称するジェードだが、実際のところそういう関係は“未だない”。

四年余りのつきあいだが、ジェードの“知り合い”のもぐり医者には何度かお世話になっている。

ドーチャは、火で炙ったあり合わせの端切れを包帯代わりに巻き付けた左の足首……というよりふくらはぎのあたり……に触れてみる。

熱を持ち始めているのが分かった。

「明日にでも頼もうかな……ちよつと危そうなげだから」

「朝一で連絡させとく」

\*\*\*

周囲すべてが真っ赤だった。

——なに、これ……火？

たじろぎ、思わずあとじさるが足が動かなかつた。周囲すべてが赤、燃え上がる炎は、二年前の暴動の時の記憶。怒声と叫喚、ものが壊される音、リニア・ガンの発砲音に混じって禍々しい響き。鈍い灰色に輝く金属とファイブ・セラミックの鎧をまとった不吉な影が飛び回り、逃げまどう人々を片端から撃ち殺し、巨大な足の下に踏みつぶしていく。

機動歩兵が町並みに次々に火を放っていく。

「焼き払え、この地区は放棄する。焼き払ってしまえ。一棟も残すな」

火が燃え上がる。焰が吹き上がる。焰が風を呼び、風が炎を載せて、辺り一面にオレンジ色に染め上げていく。

無い狂う炎の渦に襲いかかられ、ドーチャは悲鳴を上げた。

——あ、熱い、熱い……救けて、誰か、誰かあつ

身体に火が回る。足が、足が燃えている。左脚が白い焰にくるまれて、松明のように燃えている！

——いやあつ、燃えるのはいやあつ、救けて……さん！

母を呼んだのか、それとも……

“待って、アタシ達は何もしてない。暴動になんか加わっていない！”

“その娘に手を出すな、オレが相手だ！”

母の悲鳴。片腕のない……あれは、近くに住んでいた傭兵崩れの男。

“逃げる！”

背を突き飛ばされた。手に握らされたのは重いナイフ。幼い頃に使い方を教え込まれた、黒いブレードの戦闘ナイフ。  
“俺がくい止めてる間に、どこへでもいいから逃げろ！”

熱さと身体を揺さぶられるような猛烈な眩暈が、ドーチャを悪夢から覚めさせてくれた。

「ドーチャ、まずいな」

「ジェード？……あ！」

左脚が燃え上がる感覚は、悪夢の中のものではなかった。撃たれた痕が、火がついたように熱い。腫れ上がっているのが、薄闇の中でもよくわかった。

薄暗い携帯ランプの光の中で、ジェードの顔は相変わらず無表情だった。

「思ったより早かったな。明日の朝くらいまでは大丈夫だと思ってた」

「あんたのウイスキーじゃ、不純物が多すぎよ。消毒薬の代わりにもならなかったみたい」

「ほつとくと感染症から敗血症でおっ死んじまう。起きろよ。こんなところで死なれつと、後始末も出来ねえ」

「同情つてものはないの？」

「言つたはずだ」

ジェードは声を高ぶらせない。

「自業自得だつて。救急車なんてねえから、歩いてくれ。歩けなけりや、死ぬ」

「ハードねえ」

杖代わりにしろ、と木の棒を渡される。よく見ると椅子の脚だった。二脚しかない椅子をたたき壊したらしい。

「銃の方が杖にいいんだけど」

「あれはオレんだ」

「どけち」

「何とも言え」

ジェードはエアガンを手にして先導する。今度こそ本当にうめき声を必死にかみ殺しながらドーチャは従う。口ではなんだかんだと言いつつ、ジェードが“知り合いの藪医者”へ連れていつてくれるつもりであることはすぐに分かっていた。ただし、サブルーダー地区の深夜。まだ一〇代でしかない二人が、たとえ一キロ弱程度とはいえ、街路を辿るには危険すぎる。負傷していても、ドーチャにとつてさえ安全からはほど遠い場所だった。

ジェードが、貰ったばかりのエアガンを握りしめ、ドーチャが愛用のファイティング・ナイフの鞘を払ったのも警戒しすぎというには当たらない。

実際、よくたどり着けたと言うべきかも知れなかった。

息を切らしながらも、ジェードが『ここだ』と言う言葉を口にするまで、エアガンは三度も咆吼したし、ドーチャも少なくとも三人は、ナイフの柄で殴りつけたり、あるいは軽い傷を負わせて追いつけなくなったのだ。

「だれだ」

声だけが二人を迎えた。物陰に隠れているのだろうが、見事に気配を消している。

「ジェードだ」

「二人連れか」

「オレの女だ。けがをしている。診てやってくれ」  
「聞いてねえ」

「急ぎなんだ」

「オレは聞いてねえ。帰んな。オレが聞いてねえ以上、ドクには会わせられねえ」

何が“ドク”だ、藪医者があ……ドーチャは胸の内では、さすがに声にはしない。ほとんど真の闇に近い中で、ジェードがふうっと息を抜くように微笑うのが分かった。

「……それはねえだろう、アンガス」

沈黙は、威圧の代わりに戸惑いを含んでいた。

「おめえが、ドクのアルコールを横流ししてんの、知ってんだぜ」戸惑いが、あからさまな狼狽に代わるのをドーチャは肌で感じる。幼い頃から、対面した相手の感情を、微かな空気の震えや匂いのようなものとして感じ取ることができたから。

「ドクに話してもいいのか、アンガス？」

更に沈黙。

左脚が痛む。痛み之余り、気絶しないで行くのが奇跡のような状態だった。まして、背後や左右の気配に気を配って、ナイフを構え続けるなどというのは。

一キロ余りではないナイフが、だんだんと重量挙げのバーベルのような重さを感じられ始めたころ、闇が動いた。

「……！」

反射的に身体が動いていた。

艶消しのブラックに塗られたファイティング・ナイフはほとんど光を照り返さない。

闇が凝って、襲ってきたのか、と相手には思われたかも知れない。

「……ジェ、ジェード……な、んの冗談だ」

身長二メートル余りもある大男の喉元に、戦闘ナイフの切っ先が突きつけられて停止していた。切っ先は咽喉の皮膚に軽く食

い込み、それを突き破るほんのわずか手前で止まっている。手に太い棍棒を握りしめたスタイルのまま、大男は大声も出せずに喘いでいた。

「お前が悪い、アンガス。先に冗談を仕掛けてきたのはお前だから」

ジェードは、些かも声をかえない。ドーチャがいなければ、彼の頭がスイカのように叩き割られたかも知れないことなど、完全に無視している……ように見える。

「あ、謝る」

「ドクに診てもらえるか？」

「あ、ああ」

「じゃ、急いでくれ。一刻を争う病人だ」

「分かった……その前に、女に手を引かせてくれ」

「礼儀つてものを知ってシのか、アンガス」

棍棒が、大男の手を離れてコンクリートの床に接吻した重い音。

「……どこにいるんだ。その病人は？」

「いるじゃないか」

初めて、ジェードの声が笑いを含んだ。

「お前の咽喉に通風口をつけてくれようとしてるのが、重病人だ。丁寧に扱ってくれ」

激痛にもかかわらず、ドーチャは軽く吹いた。大男の表情が思われて、明かりが不十分なのが残念だった。

\*\*\*

どうして“ドク”が、ジェードの患者だけは無料で診てくれるのかは知らない。

危うく敗血症を起こしかけていた傷口を切り開いて洗浄と消毒をやり直し、この地区では黄金より貴重な抗生物質を塗布する治

療は、“藪医者”の陰口にもかかわらず驚くほど速やかで手際が良かった。

もつとも、

「済まんな、麻酔薬切らしちまってな……」

という一言で麻酔なしの手術を我慢する羽目になったドーチャなのだ。

「こいつはまた物騒なものが出回ってきたもんだな」

こいつで撃たれたんだ、と圧縮エアガンを示してみせるジェードに、

“ドク”はそう論評を返していた。

“ドク”は五〇がらみ。髪を短く刈り、がっしりした体つきで、昔はなかなかハンサムだったであろう初老の男性である。

最近飛び道具のけが人が増えた……独り言のような調子だった。

「なあ、ジェード……話があるんだが」

「聞いてねえな」

「いい加減にしたらどうだ。レアナなんぞにいたって、先は知れとる。いんや、物騒になるばかりじゃないか。そんなところで、

一五、六の子供がいきがって組織だ何だどつぱらかってみたところで、身を危うくするだけじゃないかと思うんだがな」

“ドク”……

あ、声が変わったな……麻酔を打たれたわけではないし、傷は痛むし、手術で縫われた傷口がもつと痛い。余り痛むので、身体が痛みを無視して自らを守ろうとしているらしい。瞼の重さを感じ始めたドーチャは、ちよつと耳をそばだてる。

「オレはカルシュの人間なんだ」

「分かっつとる」

「分かっちゃいねえ。オレが、オレたちがカルシュ人だつてことはな、“ドク”、ここがオレたちの国なんだ。地獄みてえなところ

だ。いつ殺されつかも分からねえ。だけどな、「ドク」、こ・こ・  
がオレたちの国で、よそはオレたちの国じゃねえんだ。他に行く  
ところなんか、どっこにもねえんだよ。あんたみたいなの……」

「おい、ジェード！」  
妙に焦った声。

“ドク”が自分の表情をうかがっているのを、ドーチャはおぼろげに  
察している。

「眠ったのか？」  
これはジェードの声。

「いんや起きとる。意識朦朧だが。いい娘だな。美人に育つぞ。  
それもすこぶるつきのグラマーだ」

「スケベ野郎」  
にべもなかった。

「オレの女だからな、手え出したら、「ドク」でも許さねえ」  
「おお、怖……」

一向に堪えた様子はなかった。

「泊まっていつていいか、「ドク」。オレ一人じゃ、家まで帰る自  
信がねえよ」

「だから……」  
「その話は終わりだ。泊まるなって言われても、泊まってってや  
るからな」

「構わんよ。飛び道具ばかりじゃない。最近はどうも人攫いま  
で流行りだしてるみたいだからな。夜の一人歩きなど、するもん  
じゃない」

人攫いって何だよ……ジェードが聞き返す声が聞こえたが、そ  
こでドーチャの意識は途切れた。

痛みと熱で、ひどく寝苦しかったが、それでも眠れることは眠

れた。

\*\*\*

包帯は二日で取れた。

抜糸も必要なかった。

「伝統的な理由で“縫う”と言うとるがな。実際は接着剤で貼り  
合わせる。きのうくらいの傷なら、それで十分」

包帯が取れるまでは感染症の恐れがある、と言う理由でこの診  
療所に引き留められた。“病室”は、お世辞にも清潔で設備が整っ  
ているとは言い難かったが、薬と、それからレアナのダウンタウン  
で最も不足するもの……栄養価の高い食事が出され、ドーチャを驚  
かせた。調理がよほど下手なのか、決して美味くはなかった。が、  
彼女にしてみれば、無償でしかもふんだんに食材を使った食事な  
どここ数年来、見たこともなかったのだ。

「あんたカルシウの人じゃないでしょ、「ドク」？」  
「ン？」

当然の帰結としての質問に、「ドク」は空とぼけた表情で応じる。  
「こんな薬だとか食事だとか、レアナのダウンタウンの藪医者  
が持つてるはずない。誰、あんた、「ドク」？」

「わしは“ドク”、さ。無免許の、もぐりの医者だ。わしの診療は  
高価い。金さえあれば、薬でも飯でも何でも手に入る。飯は横流  
しの連邦空軍の口糧だ。栄養はあるがまずいのは当たり前」

「あんたジェードの何？ どうしてジェードの友達だけ、無償で診  
るの？」

「あれは古い友人だ……と言っても、知り合って五年にはなるまい  
が。この診療所を用意してくれたのも、ブラック・マーケットに  
渡りを付けて、客筋を付けてくれたのもジェードだよ。ジェード

がおらなんだら、わしはもぐりの“ドク”ではいられなんだらうな。まったく、ジェードほどの才能があれば、表のビジネスの世界でも十分にやって行けるだろうに：偶々、カルシュに生まれただけかしに」

だからジェードに何を薦めているのか、更に問い詰めようとしたとき、診療室のドアがノックされた。

「何だ、アンガス」

「ジェードから使いが：そのお嬢ちゃんももう帰れるなら、帰ってきてくれ、と」

大男の、彼女を見る目が幾分怯えているのがおかしい。

「何かあったの？」

「ちよつと困ったことが起こった、とだけ」

ドーチャは診療台を滑り降りた。左脚の痛みは許容範囲。

「行くよ」

“ドク”は顎を引き、小さな紙包みを放ってよこす。

「薬だ。向こう三日は毎日飲むように」

——いなくなつた。

ジェードの言葉がドーチャを驚かせた。

半ば瓦礫で埋もれた廃工場や、地下に建設されていた屋内ブル跡などで、彼の“組織”は密造酒を作っている。連邦最高級のワインをはじめとして、ありとあらゆる高級アルコール性飲料の産地として知られるカルシュ・コーラル。しかし、それらの産物がカルシュ自身を潤すことは決してあり得ない。カルシュ・コーラル恒星区に住む一〇億以上のカルシュ人は、彼らの生産する最高級の食材を口にすることを許されていない。

様々なルートを経て横流しされてくる原料を使って生産される密造酒。それが、カルシュの人々の嗜好を潤す、唯一の飲み物だった。

「ヤルマルの廃工場にいた五人。みんななくなつちまつた」

物騒なダウンタウンのことである。“定時連絡”と称して、何人が一定時間ごとに伝令役を務め、異常の有無を知らせてくる。

この定時連絡が絶えたのがきのうの夕方だという。ジェードたちが駆けつけると、工場はもぬけの殻。不思議なことに醸造タンクに入っていた密造酒には手がつけられていなかった。

「誰がいたの」

「…ペック、アルマ、レオン、シャミー、それからタク」

いずれも一〇代後半から二〇代前半の、ジェードの“組織”に加わっている若者たちの名前だった。

「エリムの残党かな。ペックはちよつとだらしないけど、シャミーとタクがいて、どっかに寝返るなんて考えらんない」

「ンなはずはねえ。あの連中は、エリムだけだ。エリムが殺られちまえば、あとは締めるやつがいねえ。それにあいつらなら酒をほつとくわけがねえよ」

酒を狙っているのはエリムの連中だけではない。レアナ・ダウンタウンに巣くっているストリート・ギャングを初めとして、暗黒街の下つ端クラスに至るまで、いずれも密造酒には血走つた目を向けている。特に原料のいいジェードの酒の評判は高い。

「手がかりも何にも残つてねえ：となると、これで味締めて、またやつてくる」

ドーチャはナイフの鞘を右腿に巻き付ける。

「取り敢えず行つてくる」

「どこへ？」

「ヤルマル」

「二度同じ所、狙ってくるか？」

「かも知れないし、来ないかも知れない。じつとしててもしようがないもの。動いてた方が気が楽。ヤルマルは空のまま？」

「ほっとけるわけねえだろ、ヤン・リーにガンを持って行かせた… さつき、一時間前に定時連絡はあったから、まだ何も起こっちゃいないようだ」

そのまま二日、過ぎた。

少なくともその間、ジエードの“組織”が襲われることはなかった。サブルーダー地区のはずれにあるヤルマルの廃工場に“張り込んだ”ドーチャも、特に収穫らしい収穫を上げることができずに引き上げる毎日を繰り返しただけだった。

異変は全く別の所からやってきた。

三日目。正午までまだ暫く時間があった。

廃工場を見下ろすビルの一角でまどろんでいたドーチャは、はっとして顔を上げる。もつとも、まどろんでいても、あるいは熟睡していても、彼女は決して正体なく眠り込むことをしない。

細長い建物が三棟並んだ廃工場に一瞬視線を投げてからくるりと振り向く。右手はすでに大振りの戦闘ナイフを抜き取っている。

「だれ？」

「大変だ」

ジエード同様浅黒い肌に、くりくりした目が特徴的な少年が、かつてドアのあった壁の穴の影からひよいと顔を出す。すでに、ドーチャの手にナイフが握られているのに気づいて、まん丸い目がますますまん丸くなる。

「ラヴァール…大変って……」

「ヤン・リーがひつくくられた！ サツだよ、サツがいきなりやってきたんだ」

「サツ？」

気が付かなかった。一四歳とは言え、もう四年以上もこのサブルーダー地区で生き延びている“ベテラン”だ。彼女の監視の目をそんなに簡単にかいくぐって、こともあるうに警察官が工場に踏み込んでくるなんて！

「何でサツなんか来るのよっ」

胸元を締め上げられ、ラヴァール少年は恐怖に目を瞠って喘ぐ。怒りに逆立ったドーチャの髪が、まるで焔を背負っているように見えたのだ。まるで伝説の破壊神のまとう怒りのオーラのように。

「一〇日前の殺しの容疑だって……」

「一〇日前？」

「ヤン・リーの持ってたエアガンが殺しの凶器に違うなんて。」

オレ、見張りしてたんだけど、気が付いたらいきなり警官の野郎が工場中押し込んできて、あつと言う間にヤン・リーと、それから一緒にいた連中みんなに手錠かけて…あ、あれ、ドーチャ、あれだよおっ」

ラヴァールの指さす先を辿って、ドーチャは目を細める。視力には自信がある。レアナ市警の制服姿のごつい男が一〇人ばかり、後ろ手に電磁手錠をかけた四人の少年を連行して、廃工場の建物から出てくる。

「……？」

ドーチャの眉が翳った。

「あいつら、ほんとに市警の警官。逮捕状か、手帳でも見せた？ 一〇日前の殺しの容疑ってそう言ったの？」

ぶんぶんぶんと勢いよくラヴァールは首を振る。

「い、いきなり：踏み込んできて、手を挙げる！だもの。確か、一〇日前、えっと何かどっかの連邦の職員か誰かが殺された事件だとか言ってた。どうしよう、ドーチャ。連れてかれちまうよ」  
どこから現れたのか、廃工場の門の前に黒っぽい塗装の大型エアカー：おそらくは軽い装甲を施した武装パトロールカーだろう。それが二台。

「ラヴアール：ジェードに知らせて」  
もう立ち上がっていた。少年は唾然として目を皿のように丸くしている。

「普通の警官<sup>コップ</sup>にしては何か、変だつて。追つてく、なんて無茶は言わないけど。目印は付ける」

「う、うん！」

「見つかったやだめだよ。気をつけて！」

言葉を放り出し、ドーチャは階段を駆け下りる。身体を思い切り低くして、全速のスプリント。まだ陽が高い。華やかな色彩をほとんど喪った廃墟の跡、燃え上がるような赤毛はひどく目立つのだが、雑然と立ち並ぶ廃屋が彼女を助けてくれた。

角からそつと伸ばしかけた首を、ドーチャはあわてて引つ込める。

狭い道をいっばいにふさぐようにして停車しているエアカー。その前後に、制服姿の警官が二人ずつ、銃を構えて立っている。

「——？」

抗う声。

「……知らねえよ、知らねえつたら……殺しなんてやってねえよ。ガンは拾ったんだ。殺しなんてするわけねえだろ！やめろよつ、離せつたら、離せよおつ！」

痛性な甲高い声に聞き覚えがあった。ヤン・リーと一緒にいたはずの少年の一人。そのほかにも何人かの声がするが、いずれも

記憶にある声ばかり。警官らしい声は聞こえない。

「ちくしようおつ、離せ、離せつたら！この馬鹿警官野郎！」  
装甲エアカーのドアが開く機械音。歩哨に立っていた警官が車に戻るらしい重い足音が続いた。

もう一度、角からそつと顔を出す。歩哨の警官の最後の一人がエアカーに乗り込むところだった。

後ろに開いていたドアが、重々しい機械音と共になめらかにスライドして閉じていく。

「——！」

ドーチャは角を走り出た。

道は狭い。エアカーは、左側を半ば崩れ落ちた廃工場のコンクリート壁、右側を瓦礫と対して変わらない廃屋の群に挟まれて停まっている。左側、コンクリート壁までは一メートル弱、右側の廃屋は二メートルと離れていない。

エアカーの右側を走り抜けるドーチャの右手が閃き、耳障りな金属音が響く。エアカーの装甲は超硬度鋼のナイフの切っ先を跳ね返したが、塗料が剥がれ落ち、鈍い銀色の装甲板の表面が細い筋になつて、陽光を弾く。

車の中からは何か真つ赤な塊が走り抜けたようにしか見えなかっただろうが、金属音はさすがに気づかれたのかも知れない。

僅かのタイムラグをおいてドアがスライドし、長大な銃身が突き出された。

「誰だ！止まれ！」

威嚇に満ちた複数の叫びが轟いた時、ドーチャは廃屋群の入り組んだ通路の中に姿をくらましてしまっていた。

\*\*\*

「装甲カーの出もとは分かった」

ドーチャの、明るい灰緑色の目が丸くなってジェードの、余り表情を浮かべないクルミ色の瞳を見上げた。

サブリーダー地区には警察署はない。警官が出動するのは隣接するいくつかの地区からだ。

「オレたちが勝手に殺し合や、奴らの手間が省ける。滅多にこんな所まで入っちゃこねえ。それが、入ってきた。しかも装甲エアカーなんて代物繰り出してきやがった。一台も…だから、ラヴァールが帰ってきて、すぐにダチに連絡した。今日、装甲カーを出動させた警官がいるかって…」

ジェードは顔が広い。ドーチャから見ると、どうしてこんな人物が、と思うような人間が彼らの頼みを快く受けたり、あるいはジェードに頼み事をしてきたりするのだ。

そのジェードのネットワークが、ドーチャによって“目印”をつけられた装甲カーの発見したのは、彼女がヤルマルの廃工場から戻ってきて数時間以内のことだった。

「どこ？」

装甲カーを出したのは、サブリーダー地区の隣接地区のとある地方警察署。

「ポンチャントレーン地区の第四分署」

「分署？」

「一時間くらい前に二台、帰ってきた。“目印”も確認した」

「じゃ、ヤン・リーたちは——」

「そこにいるかも知れねえが、決まりじゃないな。実はネタが二つあって噛み合わねえ」

装甲カーがポンチャントレーン地区の第四分署に配備されたばかりの新車であることは確かだった。

「署長の奴、新車に傷つけられて怒り狂ってるぜ」

「サブリーダーに入ってきて、無傷で出られるわけじゃない」  
「相変わらずだな……」

「……噛み合わないネタってなに？」

「同じ車を全然別の所で見かけた奴がいる」

ジェードはサブリーダーから少し離れた地区の名を挙げ、ドーチャを驚かせた。四年前の『第八次レアナ暴動』でサブリーダー地区から逃げ出していった連邦の資本が新たな経済の中核として開発した区域だ。

ろくに道路さえ引かれていなかった丘陵地帯は、わずか四年の内に惑星カルシユのすべての交通機関が集中し、金属とプラスチックの高層建築が林立する一大ビジネス街に変貌してのけた。  
「アンバサダー地区？ なんで」

「だから噛み合わねえって言ってる。もし、警察からエアカーを借り出した……って言うか、警察に車を出せた奴がいる、なんてことになるって厄介だ」

こいつは危い。半ばうめくようにジェードが言う。サブリーダー周辺のローカル・ポリスなら、それなりに『人権』というやつを尊重する。少なくとも尊重するふりを見せる。逮捕されたとしても、未成年矯正区へ放り込まれるか、最悪でも流刑惑星へ送致される程度で済む。

黙って愛用の戦闘ナイフを弄んでいたドーチャが視線を上げた。  
ナイフを鞘に落とし込み、立ち上がる。

「で？」

「危くなる前に何とかする…どこへ行く、ドーチャ？」

「ポンチャントレーン。暗くなる前に着きたいから」

「……」

「援護してよ、ジェード。チンケな分署だって、がちりデイ

フェンス固められてたら歯なんか立たない：ガソリン、まだあったっけ？」

ジェードは表情を変えなかった。

「火傷に気いつける。カクテル、ミスったら洒落じゃ済まねえ」

ポンチャントレーン地区の端、サブルーダー地区にほぼ隣接する、倉庫群と小型の水素燃料タンクが立ち並んだ一角で火の手が上がったのは、その日の夕暮れ近くのことだった。

倉庫群と言ってもほとんどは空き家状態だったのだが、その内の一つにいつの間にか運び込まれていた相当量の古紙が火元だった。

乾燥しきっていたらしい古紙は猛烈な焰を吹き上げ、あっという間に倉庫全体に延焼した。この日は連絡が悪く、ポンチャントレーン地区の消防署が事態を把握したときには、すでに三つ目の倉庫が猛火に包み込まれていたのである。

ポンチャントレーンの第四分署に応援依頼が入ったのは、最初の消防隊が現場に駆けつけた直後のことだった。

「暴徒だど？」

四階の副分署長室で、救援要請の連絡を受けたガイ・デューンは呻いた。

「サブルーダーか？」

「そうです。野次馬などというおとなしい連中じゃありません」

右目の脇を鮮血に染めた消防士が、映話の画面の向こうで頬を歪めた。

「連中は何でもいいんです。とにかく騒ぎ立てて、連邦の名が付くものを何でもぶちこわす口実にしています……わっ、な、なにをする……!!」

画面が揺れ、砂嵐のようなノイズが一杯に流れる。僅かに生き残った音声回線が、叫喚と怒号、そして破壊音を吐き出し続けたのち、不意に耳障りなぶつんと言いう音が副分署長室の空気を震わせた。単調なハミング音がそれに続く。

デューンは小さく毒づき、部下を召集する。第四分署はさして大きな警察署ではない。全員を動員しても三〇名ほどだが、“暴動都市”の異名を持つレアナ。最も治安の悪いサブルーダー地区を控えるエリアである。一〇人乗りの大型装甲カー二台と、五人乗りの中型装甲カー三台、非装甲だが拘束の連絡用エアカーが二台。三〇名あまりの署員も、全員が機動歩兵連隊での週末兵士訓練を定期的を受けている。一〇倍程度の暴徒ぐらいなら鎮圧に手間取ることはあり得ない。

まず三名の署員を高速エアカーで現場に派遣したのが、ベテランらしいデューン副分署長の手堅さだっただろう。

出発させて一〇分後、最初の報告が入った。

“暴徒の数は一〇〇人余り。投石と、棍棒をふるって倉庫群を破壊して回っています。中には鉄棒を持っている連中もいますが、大した数ではありません。特にリーダーらしい存在は認められず……火事で興奮しただけのようです”

「消防隊の様子は何？」

“暴徒に邪魔されて消火活動ができません……今、五つ目の倉庫に延焼。水素タンクに火がおよぶ恐れあり。貯蔵量は定数の五から八パーセントだとのことですが、爆発すると半径半キロ以内では死傷者の出る可能性があります”

「了解した。早めに鎮圧隊を送る」

数日前に配備されたばかりの大型装甲カー一台に、完全武装の署員一〇名を乗せて現場へ派遣する。一〇〇人ほどの暴徒である。これで十分だった。分署に残留する一〇名余りも装備を調べさせ、

万が一の事態に備えさせる。

鎮圧隊に出発の命令を下そうとしたとき、映話が呼び出し音を鳴らした。

「何だ？」

「分署長です」

「分署長が……？」

半分以上が白髪に変わったデューンの眉がぎりぎりと言を立って跳ね上がったように見えた。

「分署長が何の用だ」

「報告を聞きたいから、分署長室まで来て欲しい、と」

「今、俺は忙しい。分署長には後でご報告に伺うと言っとけ」

「は……しかし……今すぐに、どうしても」と

「だから、今は忙しい。長くはお待ちせしない、一〇分がところだ」

「それが上司に対する態度といふのかね、気に入らないな、デューン」

愕然として視線を巡らせ、デューンは部屋の入り口に、今、最も会いたくない人物の姿を見出した。聞こえぬように舌打ちの音を抑える。

既に五〇歳の坂を越え、眉ばかりではなく髪の方も灰色と言うよりも白に近くなってきたデューンと対照的に、入ってきた人物は若い。三〇代か、ひよっとすると二〇代の後半かも知れなかった。幅の広い見事な長身。ややブラウンがかかった髪は短く刈り、一目で上物と分かる仕立てのスーツをまとっているのがややアンバランスだった。

ボンチヤントレーン第四分署長のクレイ・ロシュだった。

「たかが一〇〇名やそこらの火事場騒ぎです。さっさとうちの連中を送り込んで、おいほらっちまえば宜しいんです。わざわざ、

お運び頂くような騒ぎじゃありませんよ」

「分かってないな、デューン」

大股に歩み寄ってきたロシュは、頑丈そうな指でデューンのデスクをとんとんと叩く。

「過去のレアナでの暴動を見るがいい。いずれも最初は数百人規模の騒ぎだった。軽く見た現地警察が小出しに鎮圧部隊を出している内に、暴動の規模は幾何級数的に膨れ上がっていき、最終的には連邦空軍地表部隊まで動員する大暴動に発展した」

「数百人です、署長」

数百、という言葉にアクセントを置いた。

「今回は一〇〇人ほどです。過去の暴動では数百人……」

もう一度、数百を強調する。

「数百人規模の騒ぎに一分隊、一〇名ばかりを派出していたのです。今回は一〇〇人に対して一分隊です。手早くやれば、手早く鎮圧できます」

「だめだ。動員可能な二〇名全員と装甲カーを二台とも出すのだ。発砲も許可する。追い散らすだけではない、一気に鎮圧しきってしまうのだ」

「二〇名！」

デューンは目を剥く。カルシュ出身で、志願して辺境警備艦隊に入り、連邦の辺境宙域で一〇年余りも宇宙海賊との掃討戦に従事してきた。退役したとき、テイオン恒星区での市民権が与えられ、連邦の公職に就く権利が与えられたのはその代償だった。

ロシュは、連邦の中心タート・レイピア恒星区出身の根っからの警察官僚であるが、現場の経験は皆無に近い。三〇代後半で警備艦隊から警察畑へ転じ、一〇年余りを現場で過ごし、デューンとは初対面の時からウマが合わなかった。

「それでは本署の警備が手薄になります。五名そこそこ、そ

れも本職や署長まで交えての数字です。その五名そこそこでは、万一の際の対応が……」

「きみは何を心配しているのだ。実際に起こっている暴動と、起こるかも知れない暴動と、どちらが重要だというのだ」

「今日、サブリーダーで逮捕した四人の少年です」

デューンは執拗だった。サブリーダーの不良少年グループ、というよりストリート・ギャングの執念深さを彼はよく知っている。不良少年、などというカテゴリーでくくるとんでもないことになる。彼らは既に組織を持ち、こんな小規模な分署であれば平気でなぐり込んできて逮捕された仲間を救い出すくらいのことをやってのける。

「彼らなら、もうここにはいない。心配はいるまい」

「ストリート・ギャングの方は知りません。派遣した装甲カーに、明らかに故意に付けられた傷がありました。彼らはああやってどの分署に仲間が連れ込まれたかを見分けるのです。過去、何十度となく、この地区の分署が連中に襲われています。十分な警戒が必要ですよ」

「たかが餓鬼どもが、ここまで襲撃してくるなどと言うことはありえんよ。まあ、第二と第三分署に、万一のための応援依頼を私の名で出すことを許可しよう。あの……」

ロシユは顎をしゃくる。

暮れ始めた空の一角が赤く染まっている。

火事騒ぎが起こっている一角だった。すでに、この分署からも、ちろちろと上がる焔や、風に吹きなびかされ始めている黒煙が遠望できるようになっていた。

「あの騒ぎをさっさと鎮めることが先決だ。二〇名出せ、いいな。これは署長命令だ」

失敗することが分かっている山頂アタックに敢えて出かけなけ

ればならない登山家か、マストや船体にひびが入っているのに気づいているのに外洋へ出なければならぬヨットマンといったところか……吐き気を伴った予感が胸から喉元へ這い上ってくるのを自覚しながら、デューンは敬礼した。

第四分署の前で騒ぎが起こったのは、ロシユの命令で二〇名の武装警官が出動して一〇数分後のことだった。

無論、騒ぎを起こしたのはドーチャである。

ほとんどの署員が出払ったあと、デューン副分署長に“よつく警戒しろ”と言われてエントランス・ホールにいた若い警官は、ふらりと入ってきた赤毛の少女を呼び止めたのだ。

「おい、お前、勝手には行って来ちゃいかん。ポケットから手を出して止まれ」

少女は視線を彼に据え、にこりと微笑い、そして、ポケットから手を抜きだした。抜き出すと同時に、鋭いスナップを効かせて少女の首が翻った。

「な——」

警官が、それがガラス瓶であることに気づく前に、ほとんど一直線の軌道を描いて飛来した物体が彼の足下のフロアで硬い音を立てて飛散する。同時に小さな爆音とともに、オレンジ色の焔が爆発的に吹き上がった。

「ぐわあっ！」

人間のものとも思われぬ悲鳴が上がる。ガラス瓶に詰められていたのは、ガソリンを主体とした数種類の薬品の混合物。ガラスが割れると同時に、栓に詰められた化学薬品が反応を起こして爆発的に燃え上がったのだ。

一瞬に人間松明と化して死の舞踏を踊り狂う若い警官。僅かに

目を細めて、眺めていたドーチャは、無造作と言つていいほどに一直線に近づき右手を閃かせる。橙色の焰に鮮紅色の飛沫が重なった、と見るや人間松明はフロアに崩れ落ちた。

素早く飛びすさつて焰を逃れたドーチャはもう一顧だにしない。全速でフロアを駆け抜けていく彼女の背後で、作動したスプリンクラーが室内を時ならぬ驟雨で満たしていた。

五本が限度だった。

倉庫室らしい、鍵のかかっていない一室に火炎瓶をもう一本投げ込んでおき、ドーチャは階段を駆け上がる。廊下を端から端まで駆け抜けながら、抜群の視力で各部屋にかかった名札を読みとっていった。

二階。

「何だ、貴様！」

火災報知器のけたたましい警報音で異常を悟つたらしい警官が二人。一人は衝撃警棒を構え、もう一人は携帯用のレイ・ガンを抜いていた。

「止まれ！」

ドーチャの右手にブラック・ブレードの戦闘ナイフを認めたらしい、レイ・ガンを構えた方がまっすぐに銃口を彼女へ向ける。

「——！」

右手のナイフはフェイント。左手が小さくうなりを上げ、二人の足下に火炎瓶が叩きつけられる。狙いは、当然のようにレイ・ガンを構えた方。

爆音。吹き上がった焰の舌に全身を絡め取られた警官の悲鳴。

発射されたレイ・ガンが、半瞬の数分の一までドーチャの頭部が占めていた空間を超高温の光の槍で刺し貫く。

翻る深紅の髪を衝撃警棒がうなりを上げてかすめすぎる。殴打をくぐり抜け、相手の向こうずねに身体ごとぶち当てるように姿勢を更に低く沈める。その背に、衝撃警棒が垂直に叩きつけられてくる。

体当たりも再びフェイントだった。右足を蹴り、身体を左へ投げ出す。その右脚をかすめるように衝撃警棒の打撃がフロアを叩きつけ、スパークを散らした。

「ぐわああっ！」

厚刃のブレードに向こうずねからふくらはぎをぎつくりと抉られ、悲鳴とともに衝撃警棒がその手を離れる。抜群のボディ・コントロールを見せて跳ね起きた少女の身体が、棒立ちになる警官の背後にとりついた。

「——！」

悲鳴はなかった。右の脇腹から侵入した超硬度鋼の刃が急所を切り抜く。声もなく、犠牲者はフロアに折り崩れた。

気が付くとフロアに薄く煙がたなびいている。スプリンクラーが作動する、バンシーの悲鳴のような甲高い叫びと、火災警報機の狂ったようなわめき声。

三階にも一人。

みっちりとした訓練を受けた格闘術はさすがだったが、衝撃警棒も戦闘ナイフも持ち出せず、果物ナイフだったのが致命的だった。他の三人よりも僅かに抵抗が続いたにしても、結果は同じだった。オフィスの一つに火炎瓶を投げ込み、死体を一つ残して四階へ駆け上がる。

非常階段を上がりきり、通路へ出る自動ドアが開いたとき、ドーチャは本能的に身を翻し、ほとんどとんぼを切るようにして全速のスプリントを停止させた。

停止していなければ彼女の咽喉があった筈の位置を正確に貫い

て、突き出されたアーミー・ナイフが照明を照り返して輝く。そのブレードを、漆黒に塗られたブレードが下から跳ね上げ、絡みつき、はじき飛ばした。

「貴様あつ」

突き出されるレイ・ガンの銃口が光の箭を吐き散らす寸前、銀色の閃光がその銃身を横断する。耳が痛くなるような金属音。レイ・ガンの銃身の先端部分が折り砕かれ、細かな部品をきらきらと撒き散らしながら、宙に舞い上がった。

「——！」

踏み出したところに、もう一丁のアーミー・ナイフが襲いかかった。

間半髪よりもっときわどいタイミング。ドーチャの右の耳たぶを切り裂いたアーミー・ナイフの切っ先が、鮮血をしぶかせる。慣性を無視したようにそのまま水平に移動したブレードが、きしむような金属音と火花を散らして停止した。

「このストリート・ギヤングめ、俺の分署で好きにはさせんぞ！」

血管が破裂して血の光を放つ目がドーチャを真っ正面から射る。ドーチャの頬に笑いが浮かび、固定する。憤りも怒りも瞋恚もない。ただ、頬の筋肉が働いて表情を動かしただけの奇妙な、それだけに見るものの背を寒くさせる凄惨な微笑い。

微笑だけが宙に浮かんでいような錯覚を覚えさせる迅さでドーチャの身体が沈む。

ナイフを半ば空振りさせられ、危険を悟ったデューンが顎をガードすると、強靱な脚のバネを生かした蹴りが真下から彼の顎へ突き上がってくるのが同時だった。

腕の肉が潰れ、骨が軋む鈍い音。

顎を砕かれ損ね、それでも痛烈な衝撃に一瞬目が眩んだデューンがよろめいて後退する。容赦のない第二撃がその鳩尾を

狙う。これもガードしたものの、身体は吹き飛ばされ、うめき声と共にデューン副分署長は向かいの壁に叩きつけられた。

「貴様、何者だ、生命が惜しくないのか」

ドーチャは応えない。

背後に回り込み、彼女の姿を見失ったデューンが一瞬、視線を彷徨させた隙に彼の半白の髪を後ろから掴む。左手で思い切り引く。

「ぐ……」

うめき声と共に、デューンの顎が上がり、咽喉にすでにべつとりと鮮血を滴らせているブラック・ブレードが押しつけられた。

「……な」

「今日、逮捕した四人は？」

「何のことだ……」

「サブルーダー地区、ヤルマルの廃工場」

「貴様……」

「どこにいるの？」

「ここには……いない」

咽喉に差しつけたブレードに力が入る。ブレードが皮膚に食い込み、デューンは喘ぐ。そのままブレードが滑れば、彼の咽喉は鮮血を天井に向かって吹き上げる血の自噴井へと姿を変える。

「本当のことを言つて」

「本当だ」

「……」

「貴様、こんなことをして……」

「ただで済まない。でも、カルシュの人間がシエルメスの人間を殺すのをどうして躊躇わなければならないの？」

「——！」

デューンの喘ぎがはつきりと恐怖を示すものに変わるのを、

ドーチャは正確に察している。分署の副署長はたいがいがもともとはカルシュの出身。彼女の言葉は、かつては彼らの言葉でもあつたはずだ。

「いないのね？」

「……いない」

「どこにいるの？」

「……お、教えられていない」

「誰なら知ってる？」

「……分署長だ」

デューンははぐらかそうとしなかった。一〇年以上を戦場で過ごしてきた彼には、全く無駄のない動きが、ドーチャが殺人に對しての禁忌を抱いていないことを示して余りあつたのだろう。

ドーチャはこくと頷く。ならば分署長に訊けばいい。だが、ジェードの最悪の予想がそのまま当たつたようだ。警察は主体ではなく、単に使い走り勤めただけ。彼らに使い走りを勤めさせることができるのは……少なくとも連邦ではそのような存在は一つしかないはずだった。

「分署長室、どこ？」

「上……だ。五階にある……無駄だぞ、これだけの騒ぎを起こしたのだ。分署長はとつくに脱出している。いづれ署員も戻ってくるし、他の分署からの応援も駆けつけてくるはずだ……殺したな？」

「……」

「警官を殺せば、子供だとして連邦は容赦しないぞ」

「……」

「……犯人を見なかったことにしてやる」

言葉の意外さにドーチャは思わずナイフの切っ先を震わせてしまい、小さく舌打ちする。動揺を知られてしまった。

「お前が殺したのは私の部下だ。許さん。しかし、連邦に喧嘩を売るのはよせ。勝てるわけがない。たかが、レアナのストリート・ギャング風情で連邦と連邦空軍に喧嘩を売つたところで何も変わりません。闇から闇へ葬られるだけだ」

「……」

「俺を刺すなり、気絶させるなりして逃げろ。生命があつたら、お前は俺が追う。ただし、犯人の顔は見えていない、と報告して……だ」

デューンが負傷させられるか、あるいは殺されたとしても、それは結局、カルシュ・ユール内部のできごと過ぎない。支配者側シユルメスに尾を振つたかつての同胞へのテロとして扱われる。

だが、ロシュ分署長は違う。

「分署長は連邦の官僚だ。俺とは違う」

末端とは言え、直属の官僚の身辺に危害が及べば連邦の怒りは深刻になる。下手をすれば、連邦空軍の地上兵力によるサブーダー地区掃討などという暴挙さえあり得るのだ。

「信じる、というの」

「無理は承知で言っている。俺もカルシュ人だ。カルシュのことはカルシュで片をつける。連邦に介入させれば、人死にが増えるばかりだ」

デューンの言葉を理解はできた。

理性が納得した。

しかし、感情は納得しない。

最初の殺人は一二歳の時。彼女を娼婦と勘違いした、おそらくは連邦のビジネスマン。

下卑たにやにや笑いと、歯茎まで剥き出した薄汚れた前歯の印象だけが残っている。身体に手をかけられる前に、右手が動いていた。

咽喉を切り裂かれ、血だまりの中で壊れかけた自動人形のように痙攣している男を見下ろしながら、人を殺した恐怖よりも、心の一角に小さな風穴が空いたような、そんな心地よさを味わっていたことを思い出す。人格を歪ませかねないほどの殺人行為に伴うプレッシャーから、ドーチャは無縁だった。人の生命を奪う行為に禁忌を感じさせないのはただ憎悪。

憎悪は、カルシユ・コーラルを支配する狡猾な仕組みシステムに向けられるべきものだ。仕組みは目に見えぬゆえに、怒りと憎悪がぎりぎりまで圧縮され、連邦側へ立つ人間へ向けられる。

“カルシユニから連れ出してやる”：父となった男は、母にそう約束していた。母は貧民街の出身でこそなかったが、カルシユ・コーラルにか市民権のないカルシユ人は基本的に財産すら持てない。並の連邦市民になるには、カルシユ・コーラルを出て、他の恒星区で市民権を取得しなければならぬ。たとえば、デューンのように最下級の将校として、最も危険な戦場で戦い続けなければならない。あるいは、植民惑星で一〇年以上も開拓に従事し続けなければならない。

理不尽さに怒り、抗議すれば、圧倒的な軍事力によって制圧される。悪くすれば虫けらのように殺される。辺境宙域の流刑惑星へ、最低限のコストで使える労働力として送り込まれる。あるいはサブリーダーのような無法地帯の住民としてのみ生き延びることを許される。

理不尽きわまりないシステムが、いつ、どうやって作られたか、彼女は知らない。

知っているのは、カルシユから逃れであることを夢見ていた母を、連邦よそから来た男が騙したこと。金で快樂を買い、守るつもりのない言葉で縛り付けた挙げ句に、子供ができたことを知ったとたん、

姿を消した。“転勤を命じられた”と。

娘に父親ミアイロツナの名を受け継がせ、いつか“迎えがやってくる”と信じていた母を出迎えたのは、連邦空軍機動歩兵部隊による『第八次レアナ暴動』鎮圧の砲火だった。

——いつか、出てやる。こんなところ……  
——そう思う。

——連れ出して貰うんじゃない。自分で出てやる。

ジェードは言う。こ・こ・がオレたちの国だ。他に行くところはねえ、と。しかし、いやだった。レアナで、サブリーダーで生き延びたとしても、“オレたちの国”を信じたところで、結局は連邦の足下に押しひしがれ、踏みつぶされるのをほんの僅か猶予して貰っているに過ぎないのだから。

「信じない」

「……」

「連邦の人間の言うことなんか、信じない」

右手に力を込める。

瞬間——

「待て！」

声と同時に、デューンの髪を離す。離し、思い切り背を蹴飛ばしながら、持ち替えたナイフの柄で盆の窪を強打する。

声もなく倒れ伏したデューンにはもはや一顧もくれずに、ドーチャは非常階段への入り口を背にとって身構える。

「殺さなかったのか、大いに宜しい。副分署長は私の片腕だ。殺してもらっては後が困る。私の代わりに汚れ仕事をしてくれる者がいなくなるのでね——おっと、動くな！」

一瞬の熱気。嫌な音を立てて、足下のフロアに直径数センチの穴が穿たれる。かなり大口径のレイ・ガンか、ヒート・ガン。ドーチャは目を細めて、相手を見据える。

一八〇センチは優に越しているだろう。

成長期のせいもあってドーチャも背は低くない。だが、まだ一四歳だけに上背は一七〇センチに届いていない。しかも、腰を沈めて身構えているから、胸を反らすように立ちはだかつている男をどうしても見上げる格好になる。

肩幅も、上背にふさわしいだけのものが十分にある。警官の制服ではなくて、ダークスーツ。ピンストライプのワイシャツに、ネクタイを締め、ネクタイピンとカフスが深い銀色に輝いている。わざとなのか、天井の照明パネルが背景になっていて逆光。顔はよく見えなかった。

「分署長？」

「分署長閣下と呼んで欲しいものだ。薄汚い街スリット・ガール娼婦風情で、私と対等に言葉を交わすなど、身の程知らずも甚だしい」

「今日、サブリーダーのヤルマルで捕まえた四人はどこ？」

「あの連中の仲間か」

「どこ？」

「知ったところで、取り戻せなどしないぞ——おっと、動くな、と言ったはずだ」

もう一度閃光。今度は彼女のすぐ脇の壁面が丸く融ける。

相手の射撃の腕だけは認めないわけにはいかなかった。

「まったく、この程度の餓鬼一匹に手もなくしてやられるとは情けない。本庁に具申しておくべきだな。分署ごとに精強な機動歩兵を一個分隊ずつ配備すべきだと」

「みんなはどこ！」

叫ぶなり、すっと身を沈める。

デューンが取り落としたアーミー・ナイフ。

身体を倒しながら、その柄をすくい上げる。バランスを計りながら、振りかぶり、強靱な左手のスナップを効かせて投げつける。

「警告はしたぞ！」

嗜虐的な微笑いが、ロシユの頬を白く彩る。その右手が閃き、立て続けに超高熱の光の箭を撒き散らした。

「くうっ！」

右手、左手、そして左脚……灼熱した鉄の棒を押し当てられる激痛が全身を走り抜け、堪え切れぬ苦鳴がドーチャの唇からこぼれた。ブラック・ブレードの戦闘ナイフが右手から落ち、くるくると回りながら、磨き上げられたフロアを滑っていく。

「直撃はさせなかった。感謝するがいい」

「——！」

ドーチャは驚愕と不審で目を見開く。

アーミー・ナイフは過たずにロシユの右胸に突き立っていた……いや、先端の数センチがスーツの胸ポケットに突き刺さっていたナイフが、それ自体の重さで抜け落ち、重い金属音を立ててフロアに転がったのだ。

転げ落ちたナイフを、ロシユは気取った仕草で廊下の隅へと蹴り飛ばす。

「防弾繊維などというものはご存じないかね」

立ち上がろうとして、ドーチャは不覚にも悲鳴を上げてしまう。出力は押さえてあったのだろうが、レイ・ガンの射線は的確に彼女の両脚を捉えていた。

つかつかと歩み寄り、ロシユはつま先をドーチャの脇腹に蹴り入れる。

「ぐうっ！」

「戦術自体はなかなか見事だった。例の火事はお前の仲間の陽動だな、違うか？ 騒動を起こしておいて、その隙に本拠を狙う……か。敵の最小抵抗線に乗じるといえるのは戦術の基礎だ。街スリット・ガール娼婦風

情にしては上出来だし、格闘術も見事だった。だが、それだけだ。これでタイムアップ、ゲームセットだ」

サイレンの音。複数が四方から近づいてくる。

「連邦空軍の第一二二二機動歩兵連隊に協力要請を出したのだ。この際だ、サブルーダーを掃除するのもよからう」

「な——！」

「掃討戦にはご協力を願うぞ……なに、自由意志には関係ない。知識を洗いざらい吐き出させてから、そうだな、兵隊たちのおもちゃにさせてやろうか。薬が使われた肉体では再利用もできんしな」

「さ、い利用？」

「サブルーダーのストリート・ギャングなら、サブルーダーだけで遊んでいればいいものを。アンバサダーまでちよろちよろと出てきおって、余計な手間がかかってしまった」

「再利用って、何よ！」

「知りたいか？」

つま先でドーチャの身体を仰向けに蹴り転がす。抗おうにも、手も足も利かなかった。そのまま仰向けに寝転がらされたところに、もろに鳩尾を踏まれ、苦痛で目が眩む。

必死に見開いた目の先で、ロシユの男性的な容貌が薄く微笑っていた。

ドーチャは吐き気を覚えた。鳩尾を踏まれているという肉体的な苦痛に加えて、ロシユの浮かべた表情が、彼女の神経を強烈に刺激していた。短く刈り込んだダークブラウンの髪に、頑丈な顎。濃く一文字に張り出した眉。端正と言うより、やはり頑丈そうな、しかし見事に整った鼻梁、これも意思的な厚い唇。

端正な美男子ではない。鍛え抜かれた特殊部隊のエリート将校として、映画にでも出てきそうな偉丈夫。

その男性的過ぎるほどに男性的にがっしりとした骨格を見せる容貌が、奇妙な薄笑いに歪んでいた。強健で健康そのものな肉体に、小昏い、捻れ歪んだ心が宿っているようなアンバランスさは、間近で見るとは余りにも強烈な違和感を誘われるものだった。

「文字通りに再利用するのだ。クローン培養もどうやら実用化の目処が立ってきているようだが、まだ採算ベースに乗せるには高価すぎる」

「……」

「ストーンウェル総研の警備員を、サブルーダーのストリート・ギャングが襲ったのがもとのことの起こりだ。たかが、ストリート・ギャングのすることだ。裏などない、とは思ったがね。ほぼ全署員を出動させたのは、畏だったのだよ。見事にかかってくれた、感謝するぞ。どうやら、最後のホイッスルが鳴ったようだな」

サイレンが急速に近づき、停まる。

「再利用って……じゃあ……」

「おっと黙れ」

鳩尾に体重をかけられ、ドーチャは目の前が昏くなった。

——肉体の再利用……クローン培養？ 高価すぎるって？ なに、いったいなに？ ヤン・リーたちはどうなったって言うの！

「知らないことは知らないままに逝った方が幸せなこともある。一般民衆の大部分にとって歴史の真実というものは重すぎて、持つに耐えきれないものなのだ。それを知り、扱うことのできるだけの知的能力の所有者のみが真実を心得ていけばよい——おお、どうやら退場の時間も来たようだ」

通路を満たして、複数の重い靴音が近づいてくる。一〇か、ひよっとしたら二〇か……数えようとしたとき、足音が一斉に止まる。

「ご苦労。これが犯人だ。四人、殺られた。わたしも危ないところだった。ただちに逮捕拘束し、例の場所へ連行してくれ。それから、副分署長の治療も頼む」

「了解しました」  
手足をレイ・ガンで灼かれて自由の利かない身体を無理に動かした。

警官ではなく、軽装の機動歩兵の姿が視界一杯に広がる。一人が、まだ気絶したままのデューンを抱え上げ、もう一人が彼女を抱え起こす。両腕を背に回され、電磁手錠のかけられる鈍い電子音。

——あれ……  
光を失いかけていた灰緑色の目がにわかにランプのように明るくなる。

——どうして？  
視界の中で三人の機動歩兵が分署長に歩み寄り、そして、無造作とも言える動作でアーミー・ナイフを分署長の咽喉に突き立てたのだ。

「う、ぐ、わあっ……」  
何をする、と叫んだのだろうか、もはや声にならなかった。機動歩兵に突き飛ばされ、フロアに転がった分署長の喉元が鮮血の自噴井となつて、通路の天井と壁に鮮紅の抽象画を描く。のどを押さえ、呪詛とも悲鳴ともつかない意味不明瞭な叫びを上げて転げ回っていたが、数十秒後、ロシユの身体は奇妙に振れ曲がった姿勢のままフロアに倒れ伏し、動かなくなつた。

背で電子音。  
手錠が解除されていた。  
「無茶なことをしたな、ドーチャ」  
「ドク、なんで！」

「予定外の行動だ。その傷では動けまいな……説明は後だ。証拠を隠滅する」

「隠滅？」  
「燃やす。ロシユ分署長はテロリスト・グループに襲われて殺害され、分署は放火されて全焼。デューン副分署長は分署長を守るべく敢闘したが、力およばず負傷して気絶している間に、分署長を殺害された。我々が駆けつけたときにはテロリスト・グループは逃走済み。我々は猛火の中から副分署長を救い出すのが精一杯。お前さんはここにはいないはずの人間だ。黙っている」

機動歩兵たちが走り出す。走りながら、手当たり次第に火炎瓶を放り投げていく。階下には下らず、そのまま階段を駆け上がって屋上へ。  
屋上に大型のホバー・ヘリが待機していた。

完璧な訓練ぶりを見せて軽装機動歩兵たちが駆け込み、ヘリが離陸して数分後。猛火が完全に、ボンチャントレーン地区第四分署の五階建ての建物を包み込んだ。

翌日、カルシユ・コーラルの独立を謳う過激派グループの一つが犯行声明を出した。連邦当局は数ヶ月に亘る捜査を行うが、遂に犯人グループを特定できなかった。

連邦暦五六〇年二月、連邦政府警察省コーラル管区本部は、「断腸の思い」の言葉と共に、捜査本部の解散の宣言、事件は終息する。

\*\*\*

古ぼけたベッドの固い感触で我に返つた。

身体を起こす。

リバ・テープと包帯で厚く包まれた両脚と右手がひどく痛んだ。服も、安物だが洗濯された。パジャマ：だったらしいもの…に替えさせられていた。

見回す。

見覚えがあった。サブルーダーの、“ドク”の診療所の病室。

「痛うう……」

左手に刺してあった点滴の針が抜けたらしい。

「目が覚めたか」

ドアが開いた。

“ドク”の登場を予想していたドーチャは、予想を外されて目を丸くする。

「ジェード！」

ジェードは、濃いクルミ色の目を相変わらず無表情に保ったまま彼女を見つめ、それから室外へ視線を向ける。

「……“ドク”、起きたぜ」

「———？」

「無茶、やりやがって」

優しい口調ではなかった。怒っているわけでも、また不満を抱いている口調でもない。事実を事実としてだけ指摘する、平板極まりない調子は常のジェードと変わらない。彼女が死んだとしても、多分、ジェードは同じ調子で言うだろう。“どじ踏みやあがつて、このバカ”とでも。

「ヤン・リーたちは？」

“ドク”が話す

「そう、わしから話さにやならんだろう、今度のことは」

もう機動歩兵の将校姿ではなかった。いつもの、古ぼけた白衣

を引っかけ、聴診器を首にぶら下げた、“もぐり医者でござい”の姿そのままである。手に、アタツシユケースくらいのサイズの、金属のケースをぶら下げている。

それでも、心なしかきびきびとした足取りで室内に入ってきた“ドク”は、腰掛けを引き寄せて腰を下ろす。ジェードにも座るように目顔で示したが、ジェードは微かに首を左右に動かしただけだった。

「あんた、誰なの、“ドク”？」

「まず、一番最初の質問に答えよう、ドーチャ」

膝の上に金属ケースを置き、小さなカードをスロットに滑らせる。カチツとクリック音がして、ロックがはずれた。

きつく響められたドーチャの眉が更に急角度につり上がる。

「最初の質問って何よ」

「ヤン・リー……というのか。お前さんたちの仲間の行方さ」

「それと、そのケースが……」

「黙って聞けよ、ドーチャ。時間の無駄だ」

「ジェード！」

抗議を無視して、ジェードは視線を動かす。頷き、“ドク”はケースを開いた。

「———！」

それが何だか、しばらくは分からなかった。

液体を満たした円筒形の濃い褐色ガラス瓶……ガラス・ケースに見えた。上下の部分に電子部品と、微かなモーター音を発する分厚い蓋が取り付けられている。モーター音を出している一方の蓋から細い管が二本伸びていて、こちらは金属光沢のあるボンベのようなものにつながっている。もう一方の蓋からは細いコードが伸びて、キーパッドがぶら下がっている。

不得要領の視線に気付いたのか、“ドク”がキーパッドを操作す

る。

褐色のガラス円筒の一部が、すうっと透明に変わり、透明な液体が満たされた内部と、その液体の中に浮かんでいるものが、が視界に入る。真紅の色合いを帯びた拳ほどの大きさの、びくんびくんとリズムカルに脈打っているそれは……そう、肉の塊のようなもの。

——肉？

言いかけ、いきなり生じた理解が言葉を吹き飛ばした。

ロシユ分署長は言ってなかったか、肉体の再利用がどうか、クローン培養が何だとか……

——まさか、まさか……

肌が粟立ち、凍り付くような冷たさが背を走り上がり、駆け下りる。髪の毛がそそけ立ち、逆立つ印象。視線を逸らしたくても、どうしても、そのリズムカルに脈動し続ける肉塊から目を離せない。

悲鳴が逆り出る前に、“ドク”がパッドを操作した。

透明だった部分が再び不透明な褐色に戻り、彼女の視線を遮断した。

「ドーチャでも怖いものがあるんだな」

平板極まりない声が、彼女を現実に戻したようだった。真紅の髪を振り回すようにしてジェードを見上げる。灰緑色の瞳の周りにくつきりと白目が現れて、恐怖と、そして言葉にしようのない吹き上げるような怒りを物語っていた。

「違うわよっ！ 何よ、アレ……アレ……アレ……」

「ああ」

「ああ……」

「心臓。人間の。移植用組織の長距離移動用ケース入り。一組織あたり最低価格五〇〇連邦通貨から、最高は五〇〇〇連邦通貨で

販売される」

「移植用……？」

もう一つの理解。第一の疑問への回答——“ドク”はそういわなかったか？ 第一の疑問、ドーチャはこう問わなかったか、ヤン・リーたちはどこへ行ったのだ、と。

「そういうことさ」

ジェードが大幅に言葉を省略してくれたことを、この時ばかりは感謝した。

「艦隊戦闘での戦傷者治療用に、連邦空軍はクローン培養技術の開発を進めていた」

これは“ドク”。

「連邦空軍の出資する先端軍事技術開発機構から資金を受けていたのが、シュレフ・コングロマリットのバイオテクノロジ系企業グループだ。技術的には完成に近づいていたらしいし、まあ、軍事用というのであれば採算もある程度無視できる。もともとデリケートな人体組織のクローン技術だ。ここまで来るのに二〇年以上かかっているし、連邦空軍からだけじゃあない、シュレフ自身が投入した資金も膨大な額に上ったことは確かだ。まあ、技術が完成して民需用に回せれば、回収には一〇年もかかるまいがね」

ところが、ほんの数年前に、シュレフの押さえている技術とは全く異なるクローン技術での特許が取得された。デュレイン恒星区の名もないバイオ技術者と研究者のグループによる出願である。きわめて有望で有効な技術には違いなかったが、実用には莫大な資金を必要とする。先端軍事技術開発機構はもとより、シュレフ・コングロマリットも完全に無視のスタンスを決め込んでいたのだ

が……

「どうやら、そのベンチャーに融資をした金融資本があったらしい。にわかに、この新技術でのクローニングが注目を浴び始めた。

ほんの数ヶ月前からだ」

「……」

「一組織のクローニングに、期間で三分の一、費用で五分の一。コスト的に、シユレフの持つている既存技術は太刀打ちできない」と言つて、ある事情からそのベンチャーを買収したり、もっとも汚い手段を用いて叩きつぶすという手段も使えなかつたらしい。二〇年以上もかけて、莫大な人ともとの金をつぎ込んだ新商品ががらくた同然の価値に成り下がる。

「このシユレフの出先機関がアンバサダーにあるストーンウエル総研なんだが……数日前に、この総研の警備員と、多分……ちよつと未確認情報が混じつとるが……どうやら研究員の一人がストリート・ギャングに襲われたらしい。その警備員が持つておつた武器が、お前さんが持つてきたアレさ」

「圧縮エアガン？」

「つまりそういうことだ。勘ぐつた総研、あるいはもつとトップの方だろう。第四分署のロシユ分署長を動かして、サブリーダーのストリート・ギャングたちを攫い始めた。連中の主目的はこつちで、まあ、たまたま攫つてきたのが一〇代の生きのいい若者だったから、もう一つの目的にも流用しようとしたんだろう。つまり……」

「……つまり？」

「……つまり、じゃな」

咳払いの後、沈黙が続いた。

分かつていた。

だが、三人とも……少なくともドーチャは言葉にできなかった。

クローニングでは対抗できない。ならば、クローニングを必要としない、既成の生体組織を破格の安値で出し、まず市場自体を価格で制覇してしまえばよい。いかに優れた商品であっても売れ

なければゴミ同然。所詮はベンチャーである。市場から閉め出されてしまえば、資金面で連邦圏最大のコングロマリットに太刀打ちできるはずはない。

突き上げてくる嘔吐感を辛うじて堪えられたのも、言葉にしなかつたからだつた。“彼ら”の行為を言葉で表現していれば、倍加したおぞましきは胃の腑の中身すべてを嘔吐させずにはいられなかつた。

本来、犯罪として断罪されるべきでありながら、決して裁かれることのない“神自身による洗神”。シエルメスは神を持たぬ。

「もういいわ……」

ジェードでさえ、ドーチャのその言葉を救いの言葉と受け取つたかも知れなかつた。

安堵の息を付いているらしい“ドク”を、今度こそ容赦のない視線で睨み据えて、ドーチャは言葉の箭を放つ。

「あんた、誰よ、“ドク”？」

「ドーチャ！」

ジェードの口調の含んでいるものがドーチャを驚かせる。それは叱責と制止。

「何で止めるのよ！」

「オレは聞かねえ」

「君にも聞いてほしいんだがな、ジェード」

「その話は終わりだ、“ドク”。オレは、ここを離れねえ。殺されてもだ。シユレフも連邦も、あんたたちも、それからオレたちも、やつてることは同じだろ。おやまの大将ごっこさ」

「……」

「あんたたちやあ、生命を賭けねえ。オレは賭ける。生命賭けのことに手を出さねえ、あんたたちの言うなりになる気はしねえんだよ、“ドク”。まあ、あんたのことは尊敬してるぜ。こんなとこ

ろで藪医者なんかやって、身体張ってるからな」

踵を返すジェードに、“ドク”は問う。どこへ行くのだ、と。

返答は簡潔だった。

「帰る」

言うなり、もうジェードは振り返りもしなかった。

「傷が治ったら帰って来てもいいいぜ、ドーチャ。出ていきたいんだったら、好きにしろ」

肩越しに投げつけた言葉が、最後の言葉だった。

「さて……」

「やっぱり、あんたカルシュの人じゃないのね、“ドク”」

「セリアという恒星区を知っとるかね、ドーチャ」

「セリア？」

フエドレーション  
ジュナイアドラウネレション

一九の独立恒星区から構成されるシエルメス連邦。最大の独立恒星区はタート・レイピアであり、現在の政府与党である連邦共和党の地盤でもある。二大政党のもう一方の雄である連邦党はセリア恒星区にその基盤を置き、中小の辺境恒星区をも、その政治的勢力圏内に置いている。

不得要領のドーチャに、“ドク”が与えた説明がそれだった。

「タート・レイピアとセリアはあらゆる分野で対抗している。政治だけじゃない。経済や文化・芸術、学術、果ては軍事力まで……な」

アール、カートウルウ、ドレストレンなどの大恒星区に勢力を張るタート・レイピアに対して、セリアの支持基盤はやや薄い。人口が少なく、かつ辺境に偏っている。

「人材を広く連邦圏中から求める目的で、ある組織が作られた。それがわしの派遣元だ。第一二二二機動歩兵連隊もセリアから来ている」

「ジェードをスカウトに来てたのね」

「その通り。ジェードは無学だが、ビジネスのための天性の勘を持つている。組織のリーダーたるべき判断力と決断力、それに総合力で群を抜いた才能を持つていることがすぐに分かった。無論、宝石の原石と言う意味の才能だから研磨が必要だ」

「……ジェードが行くはずないわ」

「そう、もう一年越しで口説いているが、ジェードはうんと言わん。地獄のような所だが、ここがオレの国だ、と言っただけ……まあ、あと二、三年、ジェードが生きていれば、だが。まだまだ時間はある」

ドーチャはかぶりを振る。後三年。丸四年越しで口説かれたと言っただけ、あのジェードが意思を変えろとは思えなかった。言っただけではないか。“みんな同じことをやっている、おやまの大将ごっこを。生命賭けてるだけ、オレが一番ましだ”と。シュレフのおぞましい所業を知ったからには、更に言うだろう。

“オレは危い酒おんを売るし、娼婦おんだって買う。だけど人の身体を切り売ったり買ったりはしねえ”

「……どうかね？」

「え？」

聞き落とした。

「お前さんには軍人の適性があると言ったんだ」

「軍人？」

「連邦空軍の制式艦隊の高級将校となる資質がある。つまり、戦略的な資質というやつで、こればかりは教育で教え込めるものじゃない……ただ、どういう性向の持ち主がこの資質の所有者かという点だけはずいぶん研究が進んだ。六歳くらいで、もう将来の戦略家候補生は判定できるのだよ。人権問題があるから、六歳児全員にこのテストを受けさせるなどということはできないからな、軍事の天才が大学教授だとかセールスマンとして一生を終

える、という事情は大して変わらんがね」

「テスト？」

「この間、入院しただろうが。あの時に、診療にかこつけてテストにかけさせてもらった……うわっ」

“ドク” だつて言つていい冗談と悪い冗談がある」

いつ、戦闘ナイフを抜いたのかまるで見えなかっただろう。“ドク” は、喉元にびたりと刺しつけられたブラック・ブレードの前に喘ぐ。釣り上がった真紅の眉の下、吹き上がるような瞋恚の焰をまとった灰緑色の眸は一切の妥協を排して本気だった。

「あたしを……何だつて？」

「連邦空軍制式艦隊の高級士官、あいなるべくは艦隊指揮官クラスにまで上れる軍人としての資質がある……財 フクケンシヨウ 団はそう判断した」

「財団？ “ドク” が判断したのじゃなくて？」

「わたしは財団の触角だ。ジェードも、お前さんも……あと、お前さんたちには言えないが、サブリーダーではあと二人ばかりを財団に送り込んだ。触角としては優秀な部類だが、最終的な判断を下すのは財団だ」

ナイフを下げる気にはならなかった。

「あたしを……軍人だつて？」

「……その通りだ……濟まんが、ナイフをもう一ミリ下げてくれ。咽喉が切れる」

「切れたら自分で縫えばいいでしょ！ 死ぬほどは切らないでいたげるから安心なさい」

「財団は……」

「また財団！ 財団って何よ！」

「アルドリースキー財団。聞いたことはないだろうが、セリア恒星区を作り上げた功労者の一人だ。アルドリースキー財団は、ア

ヴドーチャ・ミアイロヴナ・オブロフスカヤが……」

ナイフの切っ先が動き、“ドク” 咽喉を真紅のラインと、縦に流れる鮮紅の流れとが彩る。“死ぬほどは切らない” という言葉を守るために、ヴドーチャはありたけの自制心を動員しなければならなかったのだが……

「どうして、その名前を知ってる？」

「……財団の調査力を侮らないでいて欲しい……もつとも、本人が隠しているつもりプライバシーなど、連邦空軍にかかれれば大看板に大きな文字でかき立てて、繁華街に飾り立てられている程度のものでしかないんだがね。ファンデルフェルト連邦銀行レアナ支店勤務のミアイル・オブロフスキーが現地妻との間にもうけた私生児……」

ヴドーチャの両肩が大きく動く。肩と肘が痙攣するように動き、“ドク” の咽喉に食い込ませた厚手のナイフの刃を大きく薙ぎ払いたいという衝動を辛うじて抑えたことが、それで分かった。

“ドク” ……」

元々低いアルトの声が、サンドペーパーを擦り合わせるような、ざらついて軋るような声に変わっていた。

「本気で殺されたい？」

“ドク” の前身は知らない。しかし、少なくともこの初老の男が怯懦とか、卑怯とか言う言葉とは無縁の世界で生きていたことだけは確かだ……そう思った。

「殺されたいものかね。だが、嘘つきだと思われて殺されるのも御免だ。こう見えても、わたしは生粋の軍人のつもりなんだ。財団はミアイル・オブロフスキーではなく、アヴドーチャ・ミアイロヴナにだけ興味がある」

「あたしを連邦空軍の軍人にする……だつて？」

「カルシユを出られる」

狂気の領域に入る寸前の言葉を受け止めたのはただ一言だった。  
「カルシュを？」

「カルシュ出身という前身は消せない。しかし、セリア恒星区に設けられた空軍士官学校への入学資格は与えられる。士官学校を卒業できれば、現地採用の兵隊上がり将校の道は歩まずに済む。連邦空軍の高級士官としての道が開かれる……ただし」

「ただし？」

「カルシュ・コーラルの出身という経歴だけは消えない。もう一つアナザー・政府はカルシュ・コーラルを警戒している。カルシュ・コーラルの出身というだけで、任官や昇進には困難が伴うさ」  
微笑う。喉元にナイフを突きつけられ、あまつさえ皮膚を切り裂かれて流血している状態でお、「ドク」は微笑う。

はつきり言って呆れた。呆れ、同時に感嘆もしたのかも知れない。ここまで剛胆：悪く言えば無神経、あるいは鈍感な男を彼女は他に一人しか知らない。いや、単なる無神経や鈍感では、ここまで剛胆になり得ない。四年の経験がそれを彼女に教えていた。

「ジェードも知ってるの？」

確認に過ぎなかった。別れ際のジェードの言葉が、既に「ドク」の素性を知っていること、そしてドーチャがこのオフアーをどう思うかを予測したものではなかったか。

「訊くかね、それを？」

「ドク」の返答は、直感を裏付けるものでしかなかった。

躊躇い……そして、ナイフを引いた。それ以上、それを揮う意思がない証拠に鞘に納めて見せる。

「ドク」は咽喉を撫で直し、真っ赤に染まった掌をちよつと疎ましげに見つめ、僅かに肩を竦めた。

「やれやれ、まるで二ト口だな。扱い方を間違うと、何の躊躇い

もなく人ののどを切り裂く……」

「聞かせて、「ドク」」

「アルドリースキー財団は、お前さんに奨学生の地位をオフアーしている」

「条件は？」

「財団は金を出す。お前さんはその金で自分の才能を開花させ、セリア恒星区に還元する」

「還元ってお金？ 便宜？」

「それぞれの分野で高い地位に就くことだ。政治なら上下院議員、閣僚、高級官僚。経済なら企業幹部。軍人なら高級士官。一般市民の数よりも、こういうクラスの人間の数が、実際の政治を動かす上ではものを言うのさ。別に、セリアのために便宜をはからせようだの、俸給を上納させようだの、そういうチンケ……そうチンケな考え方はしない……ちよいと話が逸れた」

幾重もの皺に包まれた「ドク」の両目が、爬虫類のそれを思わせた。感動のない眸。まるで一か〇しか受け付けない、計算機の入出力装置。

「オフアーの条件はこれ以外に二つ。セリアのアオフラフラスト首都にある空軍士官学校分校に入学し、連邦空軍高級士官への道を選択すること」

「あ、あたし、小学校も卒業てない」

それが返答だった。

「レアナのストリート・ギャングのメンバーが、空軍士官学校へはい入学れると思ってるの？」

「入学資格はハイスクールの卒業レベルの知識・教養。入学年齢制限の上限は一八歳。ハイスクールの教養課程レベルの知識など、二年も詰め込めれば十分だ。上手くすれば一年で合格するさ。実際

に任官してしまえば、士官学校の成績なんぞ問題にはならん」

“ドク”は歯牙にもかけない。

「さ、こつちの手札は晒した。カードを切ってもらおうか」

「選択の余地は？」

「拒否の自由はある。現にジェードは拒否のカードを切ってきている」

「でも、ある程度は執着する？」

「ある程度は、な」

——連邦空軍の軍人になる……？

不意に目の前に燃え上がる炎が見え、吐き気を催した。

四年前。レアナ。禍々しい銀色の装甲を赤く照り返らせながら街を掃討していく、連邦空軍の機動歩兵。

悲鳴と叫喚、建物の崩れ落ちる轟音と、頬に飛び散った熱い火の粉とドロリとした血糊の感触が蘇る。

レアナのはずれ、彼女と彼女の母、そして母の用心棒のようなことをしてくれていた傭兵崩れの片腕の男が住んでいた一帯は完全に焼け落ち、今では雑草の生い茂る荒地と化している。彼女に残されたのは、生命と、傭兵がくれた戦闘ナイフ……そして、幼い頃からナイフをおもちや代わりにしていたドーチャを面白がつて、その傭兵が一から教え込んでくれた格闘の技術だけ。

——あたしが、高級士官？

理解の外だった。想像もできなかった。連邦空軍の高級士官？デスクの前に座って、平然と“殺せ”と命じる卑劣漢。つまり、無数のカルシユの人間を見境なく殺していった、あの機動歩兵たちに命令を下す立場になると言うこと……想像しようとしても、あまりに白々過ぎて何のイメージも湧いてはこない

——でも、カルシユ・コーラルを出られるとしたら、これし

かない？

ジェードは、ここが祖国だという。

だが……

“ドク”、最後にもう一つだけ聞かせて」

「あ？」

「デュレインのベンチャーに金を出したのって、誰？」

奇妙な沈黙。

「……なぜ、知りたい？」

咽喉に痰がからまったような、妙に切れ切れとした声だった。

「理由なんかない。でも、騒ぎのものは、そいつが金を出したからじゃない。巻き込まれた方としては、知らせてもらう権利からいあるでしょ、違う、“ドク”？」

「かも知れんな……」

「知らないなら、いいけど」

「いや、分かっている」

もう一度、奇妙な沈黙。

「ひよつとして、あんたンことの財団？」

「それは違う。財団といえども、そこまで正面切ってもう一つの政府に刃向かえるほどの力はない」

「もう一つの政府？」

シユレフ・コングロマリットの別称だ。……それが“ドク”の

説明だった。連邦政府が、第一の政府。もう一つの政府が、いつの間にかこう呼ばれるようになったのだ。

「こういう言葉もある。もう一つの政府に対抗できるのは、

もう一つの政府のみ」

「洒落が聞きたいんじゃないんだけどさ」

「分からんかね」

「はつきり言つて！」

「つまり、もう一つの政府に対抗できるのは、もう一つの政府のみ……ベンチャーに出資したのは、シュレフの金融資本だよ。デュレーンを中心としたターミア辺境宙域を管轄する……な」

「え——？」

しばらく理解できなかった。

不意に理解が生じ、ついでドーチャは目の前が真っ赤に染まったような錯覚を覚えた。

「それって！」

「そう」

“ドク”は頷く。

「自分たちの内部での意思不統一……そのツケを、こういう形でカルシユに支払わせようとした、ということだ」

問題が生じた際、巨大な組織は解決に最善の道を選択することはあり得ない……“ドク”は続ける。

「その組織から最大の利益を吸い上げている個人またはグループにとって最も都合の良い解決策が常に選択される……つまり、これが今度の事件を一言で言い表す言葉と言うことだな……アヴドーチャ・ミアイロヴナ・オブロフスカヤ、これがシエルメス連邦というものの実体だ。なお、選択するかね」

「選択の余地があるの？」

「あるから、お前さんをお前さんの親父の名前で呼んだ。選択の余地がなくなった瞬間から、アヴドーチャ・オブロフスカヤは消え、アヴドーチャ・アルドリースカヤだけが残る」

「何ですって？」

ドーチャの睨が逆立つ。右手が痙攣するように震えたのは、ナ

イフの柄に手を伸ばそうとする反射的な動きを、渾身の自制心で押さえつけたためだった。

「名前を捨てろだつて？」

「財団は、お前さんがオブロフスカヤを名乗ることが不都合と判断している。細かいことまでは教えてもらえなかったがね、ミアイル・オブロフスキーが存命なんだろう」

「選択の余地は？」

もう一度、同じことを訊いた。答えは予想していた。

「残念だが、選択の余地はない。オブロフスカヤの名を捨てて、アルドリースカヤを名乗り、財団の奨学生としてカルシユを出るか、それともアヴドーチャ・オブロフスカヤとして、ストリート・ギャングとしての一生をここで過ごすか。アレもコレもはない。

アレか、コレかしか許されん」

「軍人以外の選択は？」

「士官学校への入学が条件だ。もともと、空軍士官以外への適性が判明せんとも限らんからな。絶対に連邦空軍の高級士官にならきゃならんという制約は課されないが……あまり財団の寛容さには期待せん方が賢明だ」

憎悪を消すことはできない。多分、一生、自分は憎悪を抱え込んでいくのだろう。シエルメス連邦というわけの分からない仕組みへの憎悪。この仕組みの中に自らが組み入れられ、あのロシユとかいう分署長と同じ道を歩むのか、それとも仕組み自体を叩き壊す側に回るのか、まだ分からなかったが。

ドーチャはペンを取り、書類にオブロフスカヤの姓でする最後のサインを入れた。

\*\*\*



の少女を新たな入学生として迎え入れる。真紅の髪と、灰緑色の瞳に硬質な光を湛えた長身の少女は、入学手続きとして差し出された書類に眸を走らせ、問いかけるように事務官にきつい視線を注いだ。

「サインを。入学の本人確認のための手続きです」

頷き、少女はペンを手に取る。

僅かに躊躇い、彼女はペンを走らせた。

アヴドーチャ・ミアイロヴナ・アルドリースカヤ、と。

### 第三章 エイカベイン、再び

“死ぬもんか。絶対に死ぬもんか、いつかきつと抜けてやる、抜けてやる”

「……!!」

唐突に我に返り、グラスに視線を落とす。随分丸くなった氷の角が時の流れを告げていた。

薄くなった琥珀色の液体をのどの奥に注ぎ込もうとして、アヴドーチャは視線を窓の外に走らせる。

「雪……か」

無数の白い小片が、白っぽいライトの光芒をよぎるときに一瞬だけ闇の中から浮かび上がり、すぐに闇に溶け込むように消えていく。

彼女の視線を引き寄せたのは雪ではなかった。

レアナのストリート・ギャング時代、間一髪で生命を拾うような目に遭った時に味わった、奇妙に落ちつかない、胸の底の方が泡立つような思い。微かな苛立ちを伴った戦慄に背を押されてグラスをテーブルに戻し、立ち上がった時にほんのわずかだけ足許がふらつくのに舌打ちする。

「飲みすぎたわね」

着替えながら、低い罵声は自身に向けられたもの。もともと少なくはない酒量が、転任後は目に見えて増えている。

プライベート・ドロワを開き、レイ・ガンに伸ばしかけた手を、その脇に転がっていたセラミック・ナイフに移す。

鞘を扱う。

艶消し黒塗りの刃はぼろぼろに欠け落ち、すでに殴打の道具としてしか使いようのないことを示して余りあった。

ナイフを鞘に収め、部屋を滑り出ていく足どりからは、一瞬前までの酔いは既に消えていた。

\*\*\*

殴打は唐突だった。

うなじの髪が逆立つような戦慄を感じてとっさに身体を前に放り出さなかったら、彼の頭部は、振り下ろされたセラミックの太い棍棒でスイカのように叩き潰されていたに違いない。

頭部への直撃は避けたが、棍棒の打撃はもろに右の肩口を直撃した。

「……！」

息が詰まり、右腕がじいんと痺れて動かない。

「このっ！」

甲高い金属音。転がって避けた顎を掠られた。掠られただけでも衝撃が頭に突き抜ける。口の中が切れたらしい。生臭い金属臭。

耳元をかすめるようにしてセラミック棒が舗道を抉る。雪に混じって特殊アスファルトの破片が頬を拍った。

何をする……とは叫ばない。

悲鳴は、硬いブーツの爪先に手首を一閃された襲撃者から上がった。

くるくると回転しながらセラミック棒が宙に消え、舗道に転がる鈍い音は遠かった。

「脚だ、脚をやっちまえば動けなくなる」

応えて振り下ろされた数本のセラミック棒は、しかし、人間の肉体を抉らなかつた。

レーフル・ファウルスの両足が舗道を打ち、左手先を軸にした長身がいつそ優美なほどの素早さで一回転する。

したたかに硬い舗道を殴りつけ、襲撃者たちが痺れた手に凶器を握り直したとき、被害者になるべき少年はすでに両足を地面につけていた。

「一斉にかかるんだ。一発は当たっている！」

右腕が重く、痺れている。生身の肉体なら、楽に骨を砕くだけの重さと硬度を持った、模擬白兵戦用の硬質セラミック棒。防護服を着込んでいてさえ、もろに食らえば痣になる。

数本のセラミック棒が一斉に風を切る。各自がそれぞれ異なる高さを狙って短截に揮う、トマホーク集団戦技の基本。

レーフル・ファウルスの動きは、彼らの誰の予想をも裏切った。ふわ、と影が宙に舞う。

「やつのコートだ！ 惑わされるな！」

襲撃者の一人の背がいきなり低くなつた。

スライディングするように滑り込んだレーフルのブーツが、思いきり不幸な被害者の股間を蹴り上げる。声も出ないほどの苦痛に、顔面から舗道に突っ込んだ相手の後頭部を蹴りつけるようにして、レーフルの身体がふわりと宙に浮く。前歯の砕ける音と、飛び散つた鮮血が、降り積もっていく雪と夜の闇に吸い込まれ、消える。

「……の野郎！」

硬質セラミック同士が衝突し、青白い火花が周囲に舞い散る。

ブラック・グリーンの瞳が渦巻くような金色の光を帯び、襲撃者の背を粟立たせた。

恐怖が、襲撃者たちを駆り立てた。

降りしきる雪を、人工のつむじ風が巻き上げる。

金属音に重なるように複数のおめき声。舗道に転がったセラ

ミック棒は、降り積もった雪の中に沈み込む。手首を殴り飛ばされた一人が砕けた腕を握りしめて悲鳴を上げてうずくまり、もう一人が鳩尾を押さえて雪の中に沈んだ。

「ここまでだな」

嗤い、セラミックの凶器を構え直すマクレガーとシンに、レーフル・ファウルスは無表情と呼んでいいほどの視線を投げつける。敵の一人の戦闘力を奪い取るのと引き替えに、武器を弾き飛ばされた彼は素手だった。

絶対の有利への確信が、マクレガーとシンの二人の表情に凶暴な嗤いを貼りつかせた。

「トマホークは利き手で扱え。利き手に傷を負ったときは両手を添えろ……基本を忘れたのか、レーフル・ファウルス・ネレイド。おれたちに逆らおうなんてのは一〇年早え」

「はいつくばって謝れば、腕の一本くらいで許してやらんでもないぜ。試してみたらどうだ」

レーフル・ファウルスが左手を閃かせた。

真つ正面から顔を襲った白い塊を、反射的にセラミック棒でたたき落とした瞬間、吹き飛んだのはシンだった。

「やるか……の野郎がっ！」

振り下ろしたセラミック棒は、しかし、レーフルの脇腹を直撃する寸前でマクレガーの手を離れて吹っ飛んだ。

「……？」

「なるほど……こういうやり方で再戦を求めたというわけか」

「こんなことをしてただで済むと思っているんですか、アルドリーシヤ中尉！」

刃の欠けたセラミック・ナイフで強打された手首を押さえ、マクレガーが唸り声を上げるのを、アヴドーチャはあっさり無視した。

「闇討ちというのは悪い戦術ではないが、してやられたら恥が大きいわ。早く、けが人を医務室に運んだ方がいい」

「……」

「報告はしない」

雪まみれになってのたうち回り、あるいは失神して半ば雪に埋もれている四人の仲間の姿が、大資産家の息子の乏し過ぎる判断力にも危険信号として映ったらしい。うなり声を上げながら、マクレガーは表情を打算の色で塗り替えた。

まだひざを突いた姿勢のままのレーフル・ファウルスに露骨すぎるほどの憎悪の眼差しを投げつけてから、マクレガーは最もダメージの少なそうな仲間の肩をどやしつける。

「覚えてろ！」

この場面でのおきまりの捨てぜりふを吐くだけの気力が残っていたのはマクレガー一人だけだった。

\*\*\*

差し出された手を、レーフル・ファウルスは不思議そうに見上げる。

「……」

“自分で立てます”とは言わなかったが、差し出された手を敢えて無視し、ちよつとあぶなかしい足どりで立ち上がる。両手に一杯すくい上げた雪に突っ込むようにして、血と泥で汚れた顔を拭う。

「痛むか？」

「……」

また、無視した。

微笑い、アヴドーチャはコートを投げてやる。器用に受けとめたレーフル・ファウルスは無言のままそれを羽織った。

敬礼。

「待ちなさい」

踵を返そうとし、少年は無表情を守ったまま振り返る。

「礼くらい言ったらどう、ミスタ・ネレイド？」

唇を噛み、傷跡が痛んだのか金色の眉が歪むのが見えた。

「仲裁に入って下さったことは感謝します」

「一人でも勝てたと言いたいのか？ 余り自惚れない方がいいわ。いくら強くても、五対一、六対一の劣勢で勝てるものじゃない」

「五対一でも、六対一でも勝てなきや意味がないんだ！」

「……？」

「あんなやつらに一对一でいくら勝ったって……」

もう一度、すくい上げた雪に顔を突っ込んだのは顔の汚れを落とすために違いはなかった。ただし、血や泥とは違う質の汚れを、

である。

最上質の白大理石を思わせるレーフル・ファウルスの頬が、融けた雪以外のもので雪明かりを弾いていたのを、アヴドーチャは見て取っていた。

その動作が、無視されるだろうと思った言葉が引き出した反応の激しさに一瞬戸惑っていたアヴドーチャを理解にたどり着かせた。

「……悔しいのか、ミスタ・ネレイド？」

「……！」

「五対一だったとしても、ああいう低劣な連中にしてやられかけたのが？」

してやられてなどいない……弾き返すような、それが返答だった。一三歳と二二歳の年齢差を示す上背の差をそれで埋めようとするかのように、レーフル・ファウルスは昂然と胸を反らせる。

靱い眸。

黒い焰を思わせるブラック・グリーンンの双眸が、星明かりを弾いて金色の光を渦巻かせ、明るい灰色の眸を見上げてくる。

「運が良かったのはあいつらの方だ。五対一だって、最後まで立っていたのはぼくだ。あいつらじゃない」

不意に声のトーンが上がる。叫びに届く一歩手前の声。ファウルスは、今度こそはつきりとコート袖の袖口で頬を拭った。

「鬨討ち！ 鬨討ち、分かってたのに！」

悔しいのは殴られたことでも、アヴドーチャに窮地を救われたことでもないのか……アヴドーチャは理解する。正面から鬨討ち勝てぬ以上、マクレガーたちが鬨討ちを仕掛けて来るくらいのこととは予想できたはずだったし、実際にレーフル・ファウルスは予想していたのだろう。

理不尽に殴られた……子供らしい怒りよりも、予測していながら対処できなかった自分を不甲斐ないと憤るレーフル・ファウルスに、アヴドーチャは初めて好意らしいものを抱くことのできる自分に気づいている。この少年がオーラのように全身に纏いつけている眩しいほどの覇気は不快さをそえられるものではなかった。

「再戦を勧めたのはわたしだから、わたしにも責任の一半はあるかも知れないわ」

「……もう、行ってもいいですか、中尉。門限に間に合わない」

激昂は、しかし、一瞬に消え失せる。アヴドーチャは許可を与えた。

「中尉……」

数歩行ってから、レーフル・ファウルスは迷惑そうに眉をしかめて振り返った。

「なんでついて来るんですか」

「簡単な理由よ」

もう一度微笑う。

微笑ってから、アヴドーチャは気づく。微笑いたいと思ったときに、何のつかえもなく笑えたのは何年前のことだろうか。

「……？」

鋭角的な眉をしかめ、レーフル・ファウルスは、この年若い赤毛の中尉を見上げていた。

「わたしも寮の近くに住んでいる。帰る方向は同じよ。一人よりも二人の方が心強い。違う？」

そういう軽口を自分が叩けるとは思わなかったが不快ではなかった。

レーフル・ファウルスが唇を歪めたのは不愉快さではなく、口の中の傷が疼いたかららしい。コンパスの長い脚で、舗道を厚く覆いかけている雪を踏みしだくのに注意を向けたようだった。

「……兄が大尉になるそうです。まだ一九にもなっていないに……あと六年ちよつとで大尉……」

まるで独り言のように言う。

戦術演習がきっかけだった。

マクレガーやシンの、楽観論という粗雑過ぎる戦術論が、彼の嘲笑を引き出してしまったのが事の起りだった。

士官学校予科で与えられる戦術演習は、概ね『航空機が本格的に使用され始めた時期における陸海上戦闘』にテーマを取材する。レーフル・ファウルスの所属するグループに与えられた課題は海上戦闘。

二〇日間、時限数にして一六時間の作戦準備デイスカッションでの両者の意見はまったく折り合わず、結局、グループを「仕切っていた」マクレガーの、陸軍部隊を全艦隊で護衛して目標国首都近くの海岸に一気に上陸する、という作戦を採ることになった。

「……で、その作戦に従った？」

面白がっているようなアヴドーチャの視線に、ファウルスはやや長い目の沈黙を先行させた。

戦術演習に限らず、この少年が確かに天才級の頭脳の所有者であることを示す学科成績に目を通していた彼女である。彼の硬質な唇が動いて、否定の言葉を紡ぎだした時も、意外には感じられなかった。

レーフル・ファウルスは、彼が指揮することになった空母機動部隊を連れて、完全に独自の行動に出してしまったのだ。

「六隻の大型空母から、めいっばい戦闘機を詰め込んだ二隻を分派して上陸部隊に付き添わせておいて、自分は残りの四隻で敵の根拠地になぐり込みをかけるというのには恐れ入ったわ」

「……無謀ですか？」

ちよつと不愉快そう、というよりも自分の意図を理解できないなら、別に構わないという無表情な声だった。

「無謀とは思わない」

確かに無謀ではなかった。

敵を担当した他の生徒のグループは、綿密な偵察でマクレガーの作戦をあつさり見破った。陸上部隊を増派し、飛行場を増設して待ち構えていた彼らの前に、マクレガーたちの本隊は完全に立ち往生となつてしまったのだ。地上からの猛烈な航空攻撃の前にマクレガーとシンが指揮していた戦艦部隊は大損害を受けた。レーフルが先制奇襲で敵の戦艦部隊を損傷させていなければ、退却途中を敵の戦艦に襲われて壊滅していただろう。

アヴドーチャを驚かせたとすれば、わずか一三歳に過ぎないレーフル・ファウルスの、透徹した戦術眼……というより既に戦略レベルに達している作戦能力だった。空母機動部隊を率いて敵根拠地の戦艦部隊を数日足止めするだけの攻撃をくわえておき、

一方、空からの攻撃に脆弱な上陸部隊には戦闘機空母で手厚い

護衛を与える。

そして……

「味方の戦艦までおとりに使ったのね？」

今度はちよつと驚いた目。

戦史上、水上戦艦は航空機に勝てなくなったものとして“海戦の女王”の座を降りている。レーフル・ファウルスが着目したのが、この事実と全く相反するもう一つの歴史的事実だったらしいことを、アヴドーチャは正確に察している。つまり、水上戦艦が純粹に飛行機の攻撃だけで沈んだ例は非常に少ないという事実である。

「戦艦が航空機に一方的に沈められるのは、圧倒的な数の差があり、かつ、味方の航空機が援護してくれない場合に限られている：数の差が余りないし、いざれあなた自身が駆けつけるのだから、味方の戦艦は沈むところまではいかない。ただし、敵側の飛行機を吸収してくれる、あなたの部隊に行動の自由を確保してくれる、つまり囹の役割を果たしてくれる……」

演習の結末が、レーフル・ファウルスの真の狙いが、敵国の空母部隊だったことを示して余りあった。陸上機からの攻撃で大損害を受け、ほうほうのいで逃げ回るマクレガーたちに止めを刺すべく急速進出してきた空母部隊は、いきなり横合いからレーフル・ファウルスに奇襲攻撃を食らう羽目になった。

シミュレーション時間でわずか一時間弱。敵の大型空母二隻を撃沈、二隻を損傷させて戦場から追い払ってしまったと、後は悠々として上陸部隊と合流。戦艦も空母も動かさない敵をしり目に上陸作戦を敢行、あっさり“敵目標国の首都を占領すること”という課題を成功させてしまったのだ。

「あいつが作戦通りに主力部隊を護衛していれば勝ってたんだ。あんなのはファウルスのスタンド・プレーじゃないか！」

マクレガーたちはいきり立って叫んだのだが、コンピュータ、および教官の判定はいずれもレーフル・ファウルスの際だった作戦能力に高い評価を与える結果を出していた。

「覚えてやがれ、ファウルス！」

評価結果が伝えられたときの、それがマクレガーの怒声だった。つまり、それが今日の食堂の騒ぎだった、ということね

もう一度、レーフル・ファウルスは唇を歪めたが、微笑いかけ急いでそれを止めた表情らしいことにアヴドーチャは気付いた。

——素直に笑えば、クラス中のアイドルに祭り上げられて不思議がないのに……もつたいない。

自らの感情の素直な表出をためらう……レーフル・ファウルスという少年の不可解な他の一面を理解するために十分な時間を、彼女は遂に得られずに終わる。

彼女をして再び宇宙へ呼び戻す命令が届けられるのは、このわずか二ヶ月後のことだった。

\*\*\*

極く僅かの手回り品を収めたスーツケースを片手に、アヴドーチャが二カ月弱を過ごした官舎のドアにロックを降ろしたのは、四月一〇日のことだった。

アルドリーシャが再び駆逐艦の先任航宙士として、惑星メルティアに進駐する第二艦隊への赴任を命じられたのは、二日前のこと。ファルケンファイン准将を初めとして、同僚の士官たちが送別会を開いてくれるということもなかったし、孤立には慣れている。

まだ冷涼というに近い空気を深呼吸し、アヴドーチャはスーツケースを地上車の助手席に放り込んだ。惑星シエルメスの温帯地方の北端に近いエイカベインでも、厳寒の季節は既に過去のもの

となり、頬を打つ風に僅かに名残を残すのみ。

コクピットに長身を滑り込ませ、アヴドーチャは予感に駆られたように振り返る。

眩しいほどの野心と覇気を満たしたブラック・グリーンンの眸が、ランプのような光を取り戻した灰色の視線を迎えた。

「……！」

正面から吹き付けた朔風に巻き上げられたプラチナ・ブロンドの髪が、斜め後ろからの日光をはらんで透明な焰を思わせる輝きを纏いつける。少年の右手が挙がり、そして、その唇が微笑する形に緩む。

敬礼。

絶句が、不思議な、しかし心地よい戦慄にとつて代わるのを感じながら、アヴドーチャは答礼する。

一瞬の何分の一かの後、アヴドーチャは地上車のアクセルを踏み込んだ。

未来の連邦空軍の総帥が、アヴドーチャ・アルドリーシャの名を将来の幕僚リストに初めて刻み込んだのが、士官学校予科時代であるとの説に、多くの戦史家は否定的である。しかし、軍上層部からの低すぎる評価に、敢えて異を唱えることもなく、常に最も激烈な戦場に立つことを厭わなかった深紅の髪の女性士官の胸の裡に、わずか数週間、籍を置いたに過ぎない士官学校予科でのエピソードが静かな流れをなしていなかったという証拠もまた存在しない。

アヴドーチャ・アルドリーシャが、レーフル・ファウルス・ネレイドの麾下で勇名を馳せるのは、まだ六年あまりの時が流れて後のことである。

“アドミラル・イン・スカイレット紅の提督”  
を記すことになる。

……戦史研究家は畏敬を込めて彼女の異名